

「ミカンの花が咲く頃に」

釘本 光 作

【登場人物】

・佐伯源造（72歳）

建築関係の仕事で転勤ばかりしてきたが、20年前に最後の赴任地として越してきた猿ヶ実村に定住。妻 野枝が育てたミカンの樹を守るべく、小規模ながら農業を営んでいる。

・佐伯野枝

源造の妻。11年前に、57歳で病死。村神楽に出てくる「母」と自分とを重ね、自分の娘たちや村の子どもたちに、何か残したいと、ミカンの樹を育てていた。

・佐伯実果（47歳）

源造と野枝の長女。子を持つことを諦め、8年前に東京からタータンで猿ヶ実村へ移住。現在、父と暮らしている。

・岩田美羽（44歳）

源造と野枝の次女。東京在住。16歳女子と13歳男子の母。

・陣山太一（31歳）

猿ヶ実村で生まれ育ち、東京の大学に進学したものの地元就職。県の職員として働いている。

・陣山明日実（37歳）

6年前、研修で東京に1年間滞在していた太一と知り合い交際開始。3年間の遠距離恋愛を経て、3年前に結婚。現在、初めての子どもを妊娠中。

・吉武隼人（29歳）

太一の幼馴染。猿ヶ実村近くの町で、自動車教習所の教官として働いている。

・久鍋菜摘（26歳）

太一の幼馴染。猿ヶ実村から都市部の会社に通っている。

・末延竜太（26歳）

太一の幼馴染。ミカン農家の一人息子。大学を卒業した後も、農家を継ぐ決心がつかず、村から車で30分ほどの都市部でフリーターをしている。

・末延房枝（48歳）

竜太の母。亡くなった夫に代わり、先祖から引き継いだ農家を切り盛りしている。

・田ノ上真実（34歳）

太一の幼馴染。病気がちな両親の面倒を見つつ、ミカン栽培に積極的に取り組んでいる。密かに、太一に思いを寄せている。

・原田恵（34歳）

猿ヶ実村出身のシンガーソングライター。七年前の水害で、妹 茜を失くす。実家も流されたため、今は両親を引き取り、街で暮らしている。

・兼子佐智（26歳）

菜摘や竜太の幼馴染。農業の継続をあきらめて土地を売り、猿ヶ実村を出て行く。

・梶川哲男（26歳）

菜摘や竜太の幼馴染。公共事業の下請けなどをしている地元土木建築会社で働いている。

・松田大助（24歳）

移住体験のため、猿ヶ実村に滞在。真実の元で農業研修中。

廃校になった小学校の、菜摘と竜太の同級生たち（七年前の水害で死亡）

・原田茜

恵の妹。恵のデビューを喜び、活躍を楽しみにしていた。

・浦田麻衣

保育士を目指していた。

・内村千尋

看護師を目指していた。

遠い遠い昔。

まだ、その土地に名前が無かった頃。

土の中から、ぶつと小さな芽が出る。

芽はだんだんと伸びてやがて樹になり、枝葉が出て、真っ白い花を咲かす。花の香りに誘われて、蜂たちが集まってくる。

白い花は、黄金色の実になり、木の実を求めて人々が集まって来る。

赤ん坊を背負って、黄金色の実の収穫に精を出す女。

土地を耕し始める男。

種を撒く人々。

畑仕事を手伝ったり、赤ん坊をあやしんだりしている子どもたち。

暮らしの共同体としての村が、できあがっていく。

一場 美羽、実家を訪ねる

「ごめんください！ごめんください！！」と、女の声が聞こえる。

佐伯家の庭。十月始め。昼過ぎ。

スーツケースを持った美羽が庭に立ち、家の中の様子をうかがっている。

庭は広く、リンドウやコスモス等草花の中に、ミカンの樹が一本だけ立っている。

ミカンの樹の前には供物台が置かれ、季節の花々や果物、一升瓶などが供えられている。

庭に面して縁側があり、戸の開け放たれた縁側の奥には、ちゃぶ台の置かれた居間が見える。

奥の台所から「は〜い」と声が聞こえる。

美羽

なんだ、いるんじゃない。もう・・玄関から何度も声掛けたのに。

菜摘

(台所から出て来ながら) 玄関とかほとんど使わんけんね。みんな、こっち(縁側)から出入りしようけん。ああ、美羽さん？あれ？実果、バスの時間に間に合うように帰るつち言いよつたんやけど・・。まあ、今、ご飯作りよるけん、上がつて待って。 (スタスタと台所に戻る)

美羽

・・・は？誰？

外から隼人が息を切らしながら庭に駆け込んでくる。

美羽、隼人の勢いに押されるように庭の端に避ける。

隼人

(慌てて靴を脱ぎながら) 菜摘、遅うなってごめん！仕事が長引いてから・・

隼人、美羽の存在に気付かないまま縁側から居間上がり、大慌てで服を脱

ぐ。

菜摘 (奥から声のみ) 隼人！あんた遅すぎっちゃ。もう昼でみんな帰って来るやろ。

隼人 ごめんちゃ。とにかく着替えたらすぐ行くけん。(持参した野良着を着ようとして、美羽に気付く) ひっ！…どちらさん？

美羽 はあ？

菜摘 (台所から出て来て) 実果の妹の美羽さん。

隼人 ああ。ご無沙汰しとります。吉武です。野枝の葬式るときに会った…ちゅつても一回会ったきりやけん、覚えとらんですよね。

美羽 まあ…。

菜摘 隼人。

隼人 あ？

菜摘 服。

隼人 …(自分がパンツ一丁であることに気付いて) あっ！(美羽に) すんまつせん！あの、着ます！すぐ着ます！(慌てて野良着を身に着ける)

菜摘 (隼人が脱いだ服を片付けながら) お客さんの前で服脱ぎ散らかしてから…いや、美羽さんおるん気付かんだから、急いどつたし…

菜摘 言い訳はいいけん、ご飯作るん手伝い。(スタスタと奥に戻る)

隼人 …人ん話聞け。

竜太、外から庭に入ってくる。

竜太 (美羽に気付かないまま) ただいまー。メシできとお？あ、隼人、遅いわ。

隼人 ごめん。

竜太 (聞いてない) ちょーキチかった。(凄くきつかったの意)

隼人 ごめんちゃ。これでも仕事終わって急いで…

竜太 菜摘！もうみんな降りて来るけん、飯、飯！。腹減った！。(と言いながら靴を脱ぎ散らかして縁側から上がり、当然のように居間に座り込むと、美羽と目が合う) …あんた、誰？

美羽 は？

隼人 実果の妹の美羽さんて…

菜摘 (奥から) 竜太！座つとらんで手伝い！

竜太 はあ？しゃーしーのお。(渋々立ち上がり、奥へ)

隼人 …人ん話を聞けちゃ。

菜摘 隼人も！料理運ばんね！

隼人 …はいはい。(美羽に) まあ、上がってください。(奥へ去る)

美羽、庭の端から縁側に近寄ろうとすると、庭先に房枝が入ってくる。

美羽に気づかないまま、縁側の下の脱ぎ散らかした竜太の靴を拾い上げ、じ

つと見ていたが、決意したように

房枝 ご、ごめんください。

美羽 (房枝の背後から) はい。

房枝 ひっ!

房枝、振り返って美羽を認めると、慌てて靴を手離し、庭を出て行く。

美羽 何あれ?もう!この家は相変わらず・・・

美羽、房枝が放り投げた靴を縁側の下に揃えて置く。

外から、調子っぱずれな男の歌声が聞こえる。

大助が、歌いながら庭に入ってくる。

続いて、野良着姿の実果と源造が庭に入ってくる。

実果 ただいまー。

大助 ただいま戻りましたー!

美羽 お姉ちゃん・・・(実果をまじまじと見る)。

実果 ・・・・美羽!いらっしや・・・ううん、おかえり。

源造 (美羽を懐かし気に見つめて)・・・おかえり。

美羽 父さんも・・・何?その恰好。

実果 え?(自分たちの姿を確認して) ああ、仕事着よ。

美羽 仕事着?

実果 畑仕事してるって言ってあったでしょ。

美羽 そりゃ聞いたけど。

実果 (庭の外に出て美羽を手招きし) 見て見て。

美羽 え?(実果が指さす方を見る)

実果 あそこ、ミカン畑、見えるでしょ?あれ、ウチの畑。他にも栗とかお芋とか。

美羽 畑仕事って言うか、本格的に農業じゃない。

実果 そんな大それたモンじゃないわよ。普段は父さんと二人で細々とやってるんだから。

(源造に) ねえ。

源造 ああ。(美羽に) まあ上がって。飛行機、疲れたろう。(縁側から居間へ上がり、奥へ)

大助 えっと・・・

実果 あ、松田くん、ごめん。私の妹でね、美羽。東京に住んでるんだけど、久しぶりに来てくれて。

大助 あ・・・はじめまして。松田と言います。

美羽 はあ・・・

実果 松田くんも、上がって。洗面所、奥にあるから。

大助 あ、はい。お邪魔します。(縁側から上がり、奥へ)

美羽　・誰？

実果　東京からこの村に移住体験に来てる人でね、農業の研修中なの。

美羽　この家は相変わらず、地域の集会所ですか。

実果　いいから上がって。

美羽　・・・邪魔します。(縁側から上がる)

実果　バス、すぐわかった？

美羽　タクシーで来たから。

実果　え？タクシー？

美羽　だって、空港からここまでのバスなんて無いじゃない。

実果　だから、JRの駅までのバスに乗って、そこで村役場行きのバスに乗ってって言ったじゃない。タクシーじゃ高かったでしょ？

美羽　別に。

実果　あ、そ。

美羽　(縁側の端に腰掛け)　そー言えば、高速乗って、そのまま着くのかなと思ってたら途中で高速降りちやって。なんか、立ち退き拒否してる人たちがいるから、一部分だけ高速がつながってないんだって。そこ繋がっちゃえば、もっと便利になるのにな。

竜太、いつの間にか居間にいて、爆笑している。

美羽　何？

竜太　それ、ここ。

美羽　は？

竜太　立ち退き拒否してる人たち。ここ。

美羽　ここ？ここって・・・

竜太　源ジイも俺ん家も、猿ヶ実の人間は、ほとんど拒否しとっけん。

菜摘　はいお待ちせう(台所から料理を運んでくる)。実果も座って食べて。

実果　うん。ありがと！

隼人と大助、台所から食器など運んでくる。くるくると菜摘を助け立働く。

竜太　(菜摘に向かって)　おい、ビール！

菜摘　(竜太の頭をはたいて)　調子乗んなちゃ。

源造、奥から、下着のシャツにステテコのような軽装で現れて

源造　おい、ビール！

菜摘　(爆笑)　竜太、そっくりやん！(笑うが、源造の恰好を見て)　きゃあーやだも

う！

実果　父さん、それ、セクハラ。

源造 何か？
実果 うら若き乙女に見せる姿やなかるうもん。
源造 乙女で、どこにおるんか。
菜摘 ここ！
源造 どこ？
菜摘 ここー！
源造 どこ？
菜摘 ここー！！
源造 どこ？
菜摘 どこ？
源造 どこ？
菜摘 どこ？
美羽 くそじじい！
美羽 ねえ、立ち退き拒否ってどうゆうこと？
実果 高速道路。この家も立ち退きエリアに入ってるの。
源造 山も家も売るつもりはない。
実果 ま、いいから食べよう。
美羽 ……
隼人 (美羽に取り皿とお箸を渡して) あの…どうぞ。お口に合うかどうかわからんですけど。
菜摘 それ、隼人が言うの、おかしいやろ。
隼人 あ、そっか。
源造 ビールは？
菜摘 飲まん！午後からも作業するやろ！
源造 は〜い。
竜太 しゃ〜しいのう。
隼人 松田くんも、遠慮せんで食べて。
大助 あざーつす。もう名前覚えてくれたんですね。えーつと。自動車教習所の教官の…。
隼人 吉武隼人。まあ、ゆっくり覚えてくれればいいけん。
大助 はい。
隼人 ミカン山の初もぎりはどうやった？
菜摘 なかなか活躍しとったよ。な、研修生。
隼人 ちゃんと名前で呼ばんか。わざわざ東京から、こんな辺鄙なとこまで農業体験しに来てくれとんやけ。
大助 いいつすよ。いや〜、初もぎり、面白かったつす。あの、茎にハサミを入れるのが、ずーつとやってると何か調子出て来て気持ちいいってゆーか。
竜太 昼からも頑張れ。
大助 はいっ！
菜摘 (竜太をはたいて) 調子乗んなちゃ。

真実が小瓶を抱えてやって来る。

実果 真実ちゃん。

真実 よつ！親不孝竜太がおった。

竜太 はあ！？

真実 どーせ実家帰つたらんのやる。房枝さん、心配しよるち思うよ。

竜太 しゃーしい。

真実 松田くん、ちゃんと仕事しよる？

大助 やつてますよ、大家さん。ばりばりつす。

真実 (美羽を見つめて) もしかして美羽さん！？久し振り！

美羽 え？ああ、はい……。 (覚えていない)

源造 真実。

真実 ン？

源造 お前の言う通り、切り上げ剪定したら、アブラムシが減った。

真実 やろ？樹のホルモンが活性化したけんよ。農薬使わんでもいいやる？

源造 うん！ほんで、ウチでもナギナタガヤの穂を刈ったんやけど、種がうまく採れ

ん。

真実 ナギナタガヤ！種撒くん？

源造 おう。

真実 種やったら、よう乾燥させて、……洗濯板使えばやりやすいんやけど。(みんな

に向かつて) ナギナタガヤをミカンの樹のそばに撒いとけば、春に芽が出て、伸

びて、梅雨の雨で倒れて枯れて、春の雑草、夏の雑草を抑えてくれると。根っこ

は土の微生物を活発にしてくれて、秋には積み重なって堆肥にもなる。

源造 化学肥料を使う必要がなくなる！つと！……洗濯板？

真実 やつて見せるけん。後でウチ集合。

源造・竜太・大助 おう。

真実 あ。これ。(実果に蜂蜜の入った瓶を差し出し) 今年も採れたけん。蜂蜜。

実果 うわあ、ありがとう！先ずは、お母さんにお供えするね。

真実 うん。

佐智と哲男が外から庭に入ってくる。

哲男 おつす。

佐智 (会釈する)

源造 哲男。佐智も。

実果 来てくれたの？

哲男 初もぎりには参加しとかんと。

実果 ありがとね。すつごく助かる。

竜太 お前、遅過ぎつちや。

哲男 しゃーしい。

菜摘 佐智。神楽の練習全然出て来んけん心配しとつたんよ。

佐智 ……うん。

哲男 (美羽を見て)・・・美羽さん?ご無沙汰です。
美羽 (覚えてないが)どうも。

実果、供物台に、蜂蜜の瓶をお供えいようとして、すでに供えられている一升瓶に気付く。

実果 あれ?これは・・・?

菜摘 さつき、明日実さんが持つて来た。陣山家からお供え、つて。

実果 え?!つわり、もう大丈夫なのかなあ。

菜摘 ・・うん・・・。

大助 明日実さんつて、空き家定住支援センターの。俺、お世話になったんすよねー。確か、ご主人が県庁の方で。

隼人 そう、陣山太一の奥さん。皮肉やな。明日実さんは猿ヶ実村の人口増やすつち

頑張つとるのに、太一は・・・。

竜太 太一の話はいいけん。

隼人 ・・最近さ、俺ら、なんか明日実さんに微妙に避けられとるカンジがして・・・。

太一のお父さんとお母さんも、なんか・・・見かけても顔逸らすみたいに行つてしまいいよる。

菜摘 以前は、道で会つても、よう喋つたりしよつたんにさ。
まえ

竜太 そら、喋りきらんやろう。太一がこん村で、反対派一軒一軒訪ねて回つて補償金ちらつかせようのは、わかつとうやろうけんさ。

哲男 ああ・・・。

実果 しょうがないじゃない。太一は、県の職員として当然の仕事をしてるだけよ。明日実さんに赤ちゃんできて、張り切つてんの。

隼人 張り切つとるようには見えんけど・・・。さあ!飯食つたし、早くやつてしまおう!
う!

菜摘 よし、私も行く。

竜太 お。菜摘参戦。

真実 私も畑に戻るわ。

隼人 あ、実果と源じいは、もう少し美羽さんとゆっくりして来んね。
こ

源造 なくん、気イ使わんでいいけん。(実果に)お前は残つとくか。

実果 うん。片付けもあるし、残つとこうかな。

源造 おう。

大助 (隼人に)隼人さん、礼儀に敵しい人なのに、実果さんのことは呼び捨てなんですね。

隼人 あ?・・・ああ。

哲男 さくて、やるか。

竜太 哲男は子どもん頃、ミカン狩りのチャンピオンやったもんな。

大助 へ。

隼人 高速道路作りの土木作業員に甘んじておるのはもったいなし。

哲男 それを言うなちや。板挟みで辛いんやけん。

竜太 ほんなら、実果、晩飯もよろしく。

実果 はあ？・・（笑って）もう。

竜太たち、賑やかに去る。

佐智が遅れる。何か思っている様子である。

実果 佐智。引越し先は決まった？

佐智 （頷く）

実果 どこ？

佐智 小倉の公団。立ち退きに応じたモンは、特別枠で入れるけん。

実果 引越しても神楽には帰ってくるよね？うちに泊まればいいし。あ、泊まるとい

はいっぱいあるか。

・・・・。

佐智

佐智、走って去る。

実果、走り去る佐智を心配そうに見ている。

美羽 大丈夫なの？

実果 何が？

美羽 立ち退きって。

実果 ああ。なるようになるわよ、大丈夫。

美羽 そう・・・。（庭の樹を見やって）相変わらずなんだね。

実果 え？

美羽 母さん死んでも、佐伯の家は、地域の集会所で、相変わらずミカンの樹にはお供え物。

実果 ああ・・。（縁側から庭に下りて）村の人たちにとっては、この樹は、母さんのお墓でもあるし、村のご神木の子どもでもあるからね。

美羽 ごしんぼくの子ども？

実果 まえ以前に話したでしょ。村に昔からある「始まりの樹」っていうご神木が水害で流

されちゃったって。（庭の樹を指して）この樹は、母さんが、その始まりの樹の
実の種から育てた樹だから。

美羽 （思い出して）ああ。

実果 みくんな何かかんかお供え持ってウチに寄ってくれて。おかげでいつも賑やか。

美羽 へんなの。

実果 何が？

美羽 母さんの博愛主義のせいで、ウチは引越す先々でいつでも近所のコたちのたま

り場になつて。お姉ちゃんだつて「自分の家じゃないみたい」って文句言つてたくせに、今やつてゐることは母さんとそっくりじゃない。

実果 (苦笑して) 父さんと二人つきりよりは、人の出入りがあつた方が楽しいじゃない?

美羽 あつそ。．．私、父さんは定年退職して、悠々自適に田舎暮らしを楽しんでるのかと思つてた。まさか農業始めるなんて．．．。

実果 モノつくる人にならなくなつたみたいよ、父さん。

美羽 だつて、モノ造つてたじゃない。橋とかダムとかトンネルとか。私たちはそれに付き合わされてあちこち引越したワケでしょ。母さんに「引越しやだ! お友達と別れたくない!」って言つても全然取り合つてくれなくて、「新しい所に行けば、また新しいお友達が増えるわよ」とか言われて。

実果 まあ．．子どもの頃はね、父さんの仕事のせいで、なんで私たちが寂しい思いしなきゃなんないのって恨んだこともあつたけど。

美羽 ホントだよ。

実果 でも、野菜作りつてさ、父さんがやつてきた仕事とは違つて、つくるつて言つたり、育てるつて言うか、育むつて言うかさ．．．。

実果、庭の外に出て、道の端から下を見下ろす。

見て。

美羽 何?(実果のそばに行き、同様に見下ろす) あれ．．．

実果 神社とご神木があつたところ。

美羽 山肌が削れたまんまじゃない。水害があつたの、七年前だっけ?まだ整備されてないの?

実果 高速道路が通る区域に入つてゐるから、わざとほつたらかしてあるんだと思う。

美羽 だつて、まだ暮らしてる人いるのに?

実果 私たちが立ち退いたら、あそこも整備して、道路通しちゃうんじゃないかな。

「俺が造つてきたものは、何かを破壊したその上にあるんだなあ」つて、あそこ見ながら、父さん言つてた。

美羽 ．．お姉ちゃん、父さんとうまくやつてんだ。

実果 父さんね、「お帰り」つて言つてくれたの。私が離婚して、この家に来たとき。

実家つてつたつて、私、一度も暮らしたことない家なのに．．．ヘンでしょ。

美羽 ．．そ。

実果 美羽は?

美羽 え?

実果 何かあつたの?毎年、母さんの命日のたんびに帰つてくれば?つて誘つても全然だつたくせに、今年は自分から連絡してくるなんて。

美羽 ああ．．．。

実果 ねえ。たつくと優ちゃん、元氣?

美羽 へ？

実果 私がこつち来る前に会ったとき、たつくんは幼稚園に入ったばかりで、優ちゃんは小学校の制服着て見せてくれて。可愛かったわよねえ、今、いくつになったんだっけ。

美羽 16歳と13歳。

実果 え?!もう、そんな？

美羽 うん。

実果 会いたいなあ。

美羽 姑が喜々として面倒見てくれてるわよ。

実果 そっか。美羽はちゃんとして自分の家族作ったんだね。私は挫折しちゃったけど。え？

実果 昔っからよく言ってたじゃない。「私は絶対母さんみたいにはならない!」って。「引越してばっかりだと子どもが可哀想だから、絶対転勤がない人と結婚して、自分の家族を大事にする!」って。それでホントにそーゆー人と結婚して、ちゃんとして子どももできて……。ね、また今度ここにも連れて来てよ。たつくんと優ちゃん。

美羽 ……知らない。

実果 え？

美羽 あのコたちのことなんか、もう知らない。

実果 (驚いて)どしたの？

美羽 私、家族ともうわかんなくなっちゃった!(泣き出す)

実果 ……

実果、困惑しつつ美羽に寄り添う。

ミカンの樹がざわざわと鳴る。

二場 出会い

♪ 一つ ひとりのむすめごが

ふた山超えて 黄泉の国

み母にもろうた蛆ほたり

よいよい逃げた 橘の

五つの実いば もいで喰う

むすめご その種 ふところに

なんとかかんとか 逃げ帰り

山ん畑に種ばまく

くんくんくん芽の伸びて

とうとう実がなり とんからりん♪

子どもたちの唄声が聞こえてくる。

十四年前。秋の始め。猿ヶ実小学校の校庭。
菜摘・佐智・茜・麻衣・千尋が、唄に合わせてゴム跳びをしているのを、買
い物袋を下げた野枝が楽しそうに見つめている。
そばには、脛に大きな絆創膏を貼った竜太が座っており、哲男が寄り添って
いる。

野枝 凄く面白い！黄泉の国とか、もいで喰うとか、なんか不思議な歌！

麻衣 こん村の数え唄よ。猿ヶ実のミカンの伝説の歌。

野枝 ミカンの伝説？

茜 そう。始まりの樹の伝説。

菜摘 秋に、神社でお神楽やるやろ？

野枝 ああ、あの・・猿が出てくるお神楽？

千尋 そう！あのお神楽は、この数え唄とおんなじ、猿ヶ実の伝説を伝えとるんよ。

野枝 へえ〜！面白そう！

竜太 千尋。お前ら、他所ん人とあんまり喋ったらいけんのぞ！

佐智 竜太！あんたが転けるけんいけんのやろ！

千尋 そーよ。助けてくれた人に対して失礼やる。

茜 だいたい、こん村に引越して来とる人なんやけん、他所ん人やなかるうもん。

竜太 ・・・しゃ〜しいのう。

野枝 竜太くん、(竜太の足をのぞき込んで) 血、止まった？

竜太 ・・・うん。

野枝 良かったあ！

麻衣 ちゃんと「ありがとう」言わんね。

竜太 ・・・ありがとう。

野枝 どういたしまして。ちょうど絆創膏持ってて良かった。ねえ、その伝説の話、教
えてくれる？

佐智 いいよ。

千尋 ほんならいくよ。

子どもたち、お互い阿吽の呼吸で、セリフや神楽の舞を交えながら、幼い頃
から年長者たちによって言い伝えられてきた猿ヶ実村の伝説について語り始
める。

哲男 むかし、むかし。まだこの村に名前が無かった頃。父親と母親と娘、三人で、
木の実を集めたり魚をとったりして仲良く暮らしよった。

麻衣 けど、あるとき、母親が病気になってしまった。娘も父親も必死に看病したんや
けど、母親は死んでもうた。

千尋 「母ちゃ〜ん、何で死んだと？」

「♪酷か 悲しか 母様 恋し♪」

茜 娘が、悲しいで悲しいで毎日泣き暮らしよったら、娘の目の前に、いきなり一匹の金の猿が現れて、娘に向かって「おいでおいで」っち手招きする。

竜太 「♪うふま うふまと ましらの招く♪」

菜摘 娘が猿に誘われるままに着いて行ったら、着いた所は黄泉の国。

佐智 暗がりの中に無数の、生きとうか死んどうかわからん人たちが転がっとなるんが見える。

哲男 よく見たらそんな中に、母親が転がっとなる。慌てて駆け寄った娘に母親は

麻衣 「触つたらいけん。私に触つたら、あんたも黄泉の国から帰れなくなるけん」

茜 娘が暗がりを目を凝らすと、母親の身体にたくさんの蛆虫が湧いとるんが見える。母親は自分の身体からその蛆虫を一匹剥ぎ取り

佐智 「これ持つて逃げり。私があんたにしてやれることは、もう何も無いけん。けど、

この蛆虫が、きつとあんたのことを助けてくれる。あんたも父ちゃんも、もうひもじい思いをせんですむように。あんたの子どもも、そのまた子どもも、ずーつとひもじい思いをせんですむように私が願を掛けたけん。早よ。これ持つて早よお父ちゃんのところへ帰る」

竜太 娘は蛆虫を受け取ると、泣く泣くもと来た方向へと走り出す。

菜摘 ところが、さっきの金の猿が、顔を真つ赤にして追いかけてくる。

哲男 「待て〜！逃がさんぞ〜！」

麻衣 娘は必死で逃げたんやけど、途中で道がわからなくなつた。

茜 ああ、猿が追いかけてくる。もう捕まるかと思つたその時！

母親に手渡された蛆虫に、いつの間にか羽が生えて、蜂になつた。

佐智 その蜂は、道案内でもするように、娘の前を飛んで行く。

菜摘 娘がその蜂に必死で着いていくと、不意に目の前に、金色の実をたわわに実らせた樹が、たくさん生えとう所に出た。

竜太 娘はその実をもぎ取つて、追いかけて来た猿に向かって投げつけた。

麻衣 ほしたら、その猿、実を受け取つて美味そうに食べ始めた。

哲男 娘はその実をたくさんもいで金の猿が追いつくたんびに投げつけながら必死に蜂の後をついてつた。

茜 気が付くと、娘は自分の家の前に立つとつた。もう金の猿は追いかけて来ん。

千尋 蜂は安心したようにふと何処かへ飛んで行つてしまつた。

佐智 娘が着物の懐を見ると、さっきの金色の実が一つ残つとつた。

菜摘 娘は、その実を恐る恐る食べてみた。

哲男 美味い！そうちゃん（相当の意）美味い！

麻衣 娘がむさぼるようにその実を食べていると

竜太 カリッ。甘い甘い実の中から一つの種が出てきた。

千尋 娘はその種を植えた。

茜 種からは青い小さな芽が出て来てグングン伸びた。

佐智 伸びた芽はやがて大きな樹になって、かぐわしい白い花をつけた。
花にはいつかの蜂たちが飛び交い、やがて、黄泉の国で見たのとおんなじ金色の実をつけた。

茜 娘が食べたのとおんなじ、美味いミカンの実。

菜摘 娘が持つて帰ったミカンの実が実つてから、不思議なことに他の作物もぐんぐん育つて、ようけ採れるようになった。

千尋 食べ物求めて、たくさんの人が集まつてきて、田んぼや畑を耕すようになった。

佐智 娘が植えた種から育つた樹は、それから何年経つても何十年経つても、季節になると白い花を咲かせて蜂たちを呼び寄せ、黄金色の実をたわわに実らせた。

茜 人々はその樹を「始まりの樹」つち呼んで、この季節になると収穫に感謝する神楽を舞うようになった。

千尋 ほんで、このへんは、猿が喰うた実で栄えた村、猿ヶ実村つち言われるようになったとき。

佐智 これで終しまいの米のだんご。

野枝、感動して涙ぐみながら拍手している。

麻衣 おばちゃん、泣きよーと？

野枝 だって、みんなすごく素敵なんだもん。

佐智 今、こん村にあるミカンの樹は全く部、その樹の子どもたちやつち言われとるんよ。

野枝 へええ。じゃ、あの神社に植わつてる大きな樹が・

哲男 「始まりの樹」。

野枝 凄いねえ。むかうしむかしの樹がちゃんと残つてて、今でも実がなつて。

竜太 ま、言い伝えやけどね。

野枝 ホントに素敵なお話！教えてくれてありがとう。みんな、よくここで遊んでるの？
うん。家帰つても誰もおらんけんね。

野枝 何で？

菜摘 みんな、田んぼとか畑で忙しいけん。

野枝 そっか。

千尋 やけん、時々、隼人とか太一とか・

茜 真実とかウチの姉ちゃんとかも一緒に遊ぶよ。

佐智 隼人は中学生で、太一とか真実は高校生やけどね。

野枝 へー！私はね、佐伯野枝つて言うの。ミカン山に登る途中の（坂の上を指して）あの家に住んでる。

千尋 さえきさん？

野枝 「のえ」でいいよ。

佐智 おばちゃんなんに？

野枝 だって、みんな名前で呼んでるんでしょ？

佐智 うん。

野枝 だから、おんなじ。「のえ」。私、たいてい、あの家にいるから、いつでも遊びに来て。隼人くんとか太一くんも誘って、みくんなで来ていいからね。
子どもたち うん！

野枝、子どもたちに囲まれて微笑む。

三場 野枝と子どもたち

♪うちのこの子に 赤いベベ着せて
ぐるりたたいて 針仕事 ヨイヨコ♪

子守唄を唄う声が聞こえる。

13年前。二月。夕刻。

佐伯家の居間で、野枝が唄を唄いつつ、ベビー服や女兒の服などを段ボール箱に詰めている。

中学の制服姿の菜摘が、庭に駆け込んで来る。

菜摘 野枝—！

あ、菜摘ちゃん、お帰り。

菜摘 千尋たち来とらん？

野枝 今日は来てないけど。

菜摘 よし！（縁側から居間に入る。）

野枝 これ詰めてしまったら、今、お茶持ってくるね。

菜摘 何しよ—と？

野枝 ん？赤ちゃんが生まれたからね、お洋服送ってあげようと思って。

菜摘 赤ちゃん—？

野枝 うん。私の孫。

菜摘 孫？野枝って、おば—ちゃんなんや。（ベビー服や赤いワンピースを広げて見て）
うわっ、ちっちゃー！可愛い—！

野枝 （ベビー服を指して）こっちが赤ちゃんの服で、（ワンピースを指して）こっちが
お姉ちゃんの優ちゃんの服。

菜摘 へ〜。ねえ、孫ってカワイイ？

野枝 可愛いよ〜。孫も可愛いし、菜摘ちゃんも千尋ちゃんも、子どもはみくんな可愛
い。みくんなおんなじ。

菜摘 ……うん！ちよっとトイレ。（慌てて奥へ）

庭に、米袋を抱えた房枝が入って来て、縁側に袋をドスンと置く。

野枝 房枝さん。

太一 うん。ここやないところで暮らすとか、考えたことなかった
野枝 ここやないところ？

太一 うん。

野枝 どこ？

太一 東京。

野枝 そっか。

竜太 (不意に庭に入ってきて来て) ただいまー。

野枝 ああ、竜ちゃん、おかえり。

菜摘、奥から顔をのぞかせるが、竜太を見て慌てて引つ込む。

竜太 (当然のように縁側から居間に上がり、座り込む) 野枝、腹減った。

野枝 はいはい。

太一 (竜太に) お前、何しよんか。

竜太 あ？

太一 なんでフツーに「ただいま」なんか。自分家じぶんちに帰れや。

竜太 自分家に帰っても誰もおらんけん。

野枝 ちよつと待ってね。おにぎり握つとつたけん、今、持って来るね。

竜太 うん。

野枝 ほら、先に手洗って。

竜太 ええ。

野枝 早く。

竜太 しゃーしいのお。(しびしび洗面所へ向かう)

隼人が顔をのぞかせる

隼人 太一、いる？

野枝 ああ、隼人、おかえり。(荷造りを終えた段ボール箱を持って奥へ引つ込む)

太一 (隼人に) お前もか。

隼人 あ？

太一 フツーに野枝ん家に帰ってくんなちや。

隼人 俺は太一を探しに來ただけやけ。

太一 何で？

隼人 お前、東京の大学に行くつち聞いたんやけど、ホント？

太一 ああ……。

隼人 ホントか……。

太一 まだわからん。吉崎が「受けれ」つち言うけ受けただけやけ。

隼人 社会の？進路指導の？

太一 うん。「あそこん大学やったら寮もあるし、奨学金も申請できるけ受けてみれ」っ

ち。

ああ。

まさか受かると思わなかったし。

太一 (洗面所から戻っていて) 太一はいいよなあ。

あ？

頭もいいし、気楽やし。

気楽ち何か。

家継ぐこと考えんていいやん。

ああ……。

……。

(奥から、皿に盛ったおにぎりを持って来て) はい、おまたせ。

お、うまそ！(皿に手を伸ばす)

ほら、隼人もたいちゃんも、手洗っておいで。みくんなで一緒に食べよ？

はい。(奥へ)

野枝。

ん？

野枝はさ、何で俺たちに、そんな親切にしてくれるん？

親切？

うん。俺らのために、おにぎり作っとってくれたりとか、お菓子とかお茶出してくれたりとかさ。

その日にある物を出してるだけよ。みんなのお父さんやお母さんは田んぼや畑で忙しいでしょ？でも、私は一人でこの家にいるだけだし。どしたの？急に。へんなの。

へんなのは、野枝やる。

何が？

やけ・フツは……こん村には、外からの人はあんまり住みたがらんしさ。

そーなん？

知らん人をそんなボンボン家にあげたりせんしさ。

知らん人じゃないじゃん。

隼人、手を洗って、戻ってきている。

茜・麻衣・佐智が、庭になだれ込んで来る。

佐智 (息を切らし、必死の形相で) 野枝！竜太と菜摘おる？

野枝 佐智ちゃん、茜ちゃんも麻衣ちゃんも、お帰り。

佐智 (居間に竜太を発見して) あ、おった。

茜 ほら。

麻衣 やっぱ「こや」。

庭の外で、「いいけん、おいでー！」と声が聞こえる。

千尋が哲男を引き連れて入って来る。

千尋 竜太——!!。

千尋、居間の竜太をめぐがけて縁側から上がりこむ。
太一と隼人、びびってよける。

竜太 あ？

千尋 あんた、合唱は？

竜太 めんどい。

佐智 めんどいやないやろ。

麻衣 サボりなさんな。

茜 男子の声が足らんけん、哲男も困つとおやろ。

哲男 俺はベツに……

女子 あん！？

哲男 困つてます。

千尋 菜摘は？

隼人 (竜太に) 何怒らしとんか。

竜太 知らん。

千尋 (家の奥に向かつて) ちよつと菜摘——!おるんやろ——菜摘——!
今、トイレ。

麻衣 あ!おにぎり、おいしそ。

茜 麻衣、あんたね……

麻衣 ん？

野枝 食べる?(台所へ)

太一 何でお前らまでここん家に来るんか。

佐智 菜摘が逃げたけん。

菜摘 (出てきて) 逃げとらんよ。先に帰っただけやん。

千尋 先に帰ったらダメやろ。

茜 そうよ、合唱の練習。竜太もね。

竜太 俺、遠慮しとく。

佐智 はあ?!

千尋 卒業式の在校生合唱の指揮は、菜摘っち決まったやろ。

菜摘 そんなんしきらんもん。

千尋 しきらんしきらん言いよつたら、いつまでもバカにされたまんまやろ!

麻衣 ちいちゃん、顔怖いよ。

千尋 しゃーしい。

茜 小学校で合唱やったときの菜摘の指揮がカッコよかつたけん、みんな菜摘がいい

ちいちゃんにさ。

菜摘 小学校でやるんと中学でやるんは違うやん。他の小学校から上がってきとるコも

おるしさ。ピアノも習ったことないくせに、指揮とかできるんかつち言われて…。
あいつら、ウチん村んこと、バカにしくさつとうもんな。
塾とかスイミングとか行くんが、そんなに偉いんかのう。
菜摘 「猿ん子！猿ん子！」 っちおちよくるんよ…。(泣き出す)
野枝 (皿におにぎりをのせてきて見守っていたが) はいはいはいはい、まあ食べて食
べて。あ、向うで手洗って来てからね。
佐智 こんどおちよくつてきたら、私がぶち喰らしちやる。
千尋 私も手伝う。
茜 (竜太と哲男に) あんたらも手伝いいよ(手伝いなさいよの意)。
竜太&哲男 はあ？
女子 あん！？
竜太&哲男 手伝います。
麻衣 大丈夫よ。私、菜摘が指揮しやすいうように大声で歌うけんさ。
茜 私も！十人分くらいの大声で歌うちやる！
千尋 やけん、手、洗ってこよ。
茜 ほら。

女子四人が、泣いている菜摘を連れて洗面所へ。
野枝も、「あ、タオル新しいの出すから」などと言いながら奥へ。

哲男 隼人。
隼人 あ？
哲男 高校つち、楽しい？
隼人 はあ？
哲男 いや、高校ち、どんなとこかなあつち思うて…。
隼人 楽しいつちゆうか…みんな行きようけ仕方なく行きよるようなもんやけど。
哲男 そつか…。
隼人 何か？
哲男 俺は、たぶん高校には行かんけんさ。
隼人 何で？
哲男 妹も弟もおるけん、働かんと。
隼人 ……。
哲男、洗面所の方へ去る。
太一、それを見つめる。

野枝 (洗面所から戻って来つつ) あ。たいちゃん、なんだっけ。
太一 あ？
野枝 何か話の途中やなかった？

洗面所の方で、女子たちの大爆笑が聞こえる。

太一 もういいわ……。

源造 (奥Ⅱ玄関から入ってきて) なんか、騒々しいなあ。

野枝 あ、おかえりなさい。早かったのね。

源造 うん。今日は現場が早く終わったから。

太一 お邪魔してます。

源造 おお。

隼人 おかえりなさい。

女子五人と哲男、洗面所から戻ってきて、口々に「あ、源ジイ、おかえり」と言いながら食卓を囲み、「野枝、いただきま〜す」と言って、おにぎりを頬張る。

源造 お前らさ。

千尋 ん？

源造 何で、野枝のことは「野枝」なのに、俺のことは「源ジイ」なんだ？

茜 あ？

源造 「ジイ」ってのは、ジジイの「ジイ」だろ。

麻衣 うん。

千尋 見た目？

佐智 おいちゃんってカンジやないもんね。

哲男 うん。

茜 髭生えとっし。

源造 髭ぐらい、太一だって隼人だって生えるだろう。竜太だって哲男だってさ、そろ

そろ下の毛も生えてくる頃だろ。

野枝 ……(源造をはたく)

佐智 何それ。

茜 信じれ〜ん。

千尋 セクハラや。

麻衣・茜・千尋・佐智 セ〜クハラ！セ〜クハラ！

源造 ああ、もう、しゃーしい。

佐智 源ジイ、「しゃーしい」て言った。

麻衣 ホントや。

菜摘 猿ヶ実人みたい。

源造 猿ヶ実の人やろう。今、ここにおるんやけ。

千尋 「おる」やって。笑える。

食卓を囲んだみんなで笑い合う。

庭に、袋を下げた真実が入ってくる。

真実　ごめんください。

野枝　ああ、真実ちゃん。上がって。

真実　すぐ帰るけん。(野菜の入った紙袋を差し出して)これ、母ちゃんが、この間のお礼に持って行けつち。

野枝　わあ、ありがとう。

真実　源ジイに畑手伝ってもらって、ホント助かったけん。

野枝　お父さん、具合、どう？

真実　うん。まあ、ぼちぼち。

源造　真実。休みの日でよかったら、いくらでも畑手伝うけん。

真実　うん。ありがと。

太一　(居間から縁側に出てきて)おう。

真実　あ……。

太一　久しぶり。

真実　・・うん。

太一　家、忙しいと？

真実　うん。相変わらず。

太一　そっか。

真実　・・・ほんなら。(行こうとする)

太一　俺、受かった。

真実　(立ち止まり)あ？

太一　大学。受かった。

真実　大学・・・。そっか。そうよね。

太一　・・うん。

真実　どこん大学？

太一　東京。

真実　東京かあ。凄いな。ほんなら、元気で。(一瞬、帰ろうとするが、すぐに居間の女子達の輪に加わり)何食べよるん？私にもくれんね。(太一に背を向け、おにぎりを頬張る)

太一　・・・・。

野枝　・・・たいちゃん。

太一　ん？

野枝　人つてさ。どつかで知り合わんと、ずーっと知らんまんまやもんね。

太一　・・・。

野枝　私は、ここに引っ越して来て、たいちゃんも、みんなとも、知り合えて、嬉しい。嬉しいよ？

太一　・・・うん。

庭が、夕焼けに染まってゆく。

野枝、佇んでいる太一を見つめている。

四場

実果の日常

佐伯家。野枝の命日＝村神楽の奉納の日。朝。

実果が、鼻唄を唄いながら拭き掃除などしている。

実果

♪私はミカン ミカンの樹

あなたにそっと 届けたい

小倉 博多 道の駅から♪

(CMの物真似で)「あなたに届け。銘菓、ミカンの樹」

美羽

(奥から出て来て)「何やってんの?」

実果

やだ!CMソングじゃない。よくテレビでやってる。「銘菓、ミカンの樹」。

美羽

知らない。

実果

え?そう?」

美羽

ウチ、東京だし。

実果

あ、そっか。原田恵ちゃんって、猿ヶ実村出身のシンガーソングライターでね、ウチにもよく来てたのよ。高校出てすぐ博多の芸能プロダクションに入ってたね。

あ、西山家具のCMソングも作ってた。こっちじゃケツコー売れてるんだから。そ。

美羽

ねえ。電話切っちゃってよかったの?せっかく旦那様が心配してかけてくれたんだから、ちよっとぐらい話せばいいのに。

美羽

いいの。私がどんな思いで優と拓海を私立に入れたか、全然わかってないんだから。

実果

まあ、自分の子どもには安定した人間関係の中にいさせてあげたいっていう美羽の気持ち、わかんないでもないけど。私たち、引越しばっかりで、「幼馴染」って、憧れだったもんね。

美羽

でしょ?私立だったら、一度入っちゃえばずっと同じお友達と過ごせるワケだし。

実果

あのコたちが寂しい思いをしないようにって、小学校の受験頑張ったのに、優だけじゃなくて拓海まで公立に転校したがるなんて……。

美羽

ああ……。

「俺は、優や拓海が考えて出した結論を尊重したい」って、何それ?だいたい何でわざわざこの家の電話にかけるわけ?ホントに心配なら、私のスマホにかけるとかラインするとかすればいいじゃない。

実果

あ、家の中、電波不安定なのよ。繋がったり繋がらなかったり。

美羽

ええ!?(スマホを取り出し確認して)ホントだ。圏外になってる。

実果

庭先に出れば繋がるわよ。

美羽

はあ?もう、早く言つてよ……。

美羽、縁側から庭に出ようとして、外から縁側の方を覗いていた房枝と目が

合う。

美羽 え？

実果 (気付いて)房枝さん、おはよう。．．あ、竜ちゃん？今日はまだ来てなくて．．。

房枝、そそくさと去る。

美羽 あの人．．．

実果 え？

美羽 昨日も来てた。(縁側の下を指して)ここにあった靴、持ち上げて見てて．．。

実果 ああ．．。

美羽 あ、電波電波、どこなら繋がるのよ．．。(庭に下りる)

竜太が、スタスタと庭に入ってきて来る。

スマホが繋がる地点を探して、美羽が庭をウロウロしているのが目に入る。

竜太 おばちゃん、スマホ？こっち。(美羽の腕をつかみ、誘導する)

美羽 は？(スマホにアンテナが立つのを確認して)あ、．．ありがとう。

竜太 うん。(縁側から実果に向かって)おっす。

実果 おはよう。竜ちゃん、昨日、どこに泊まったの？今、房枝さん来てたわよ？

竜太 (一瞬気まずそうな表情を見せるが、奥に向かって)源ジィ。

実果 もう．．。父さくん。(と奥へ声をかける)

源造 (奥から出て来て)あ？

竜太 今日も行くんやろ？

源造 ．．。

竜太 山。ミカンの。

源造 今日は行かん。

竜太 え？！何で？

源造 今日は、神楽の準備もあるし。

竜太 けど、もう、いい具合に色づきようけん、早く収穫してしまわんと。

源造 今日はいいけん。

竜太 ？

源造 お前、家ん方、手伝え。

竜太 あ？

源造 おまえん家の畑。

竜太 ．．。

源造 竜太。

実果 竜ちゃん？

美羽、竜太の方を見る。

竜太、美羽の視線を避けるように庭から出て行く。

実果

……。

源造 (奥へ引つ込む)

美羽 あのコ、どしたの？

実果 うん。さっきの・房枝さんの子なんだけどね、村には帰ってくるのに、自分の家には顔出さないみたいで。

美羽 何で？

実果 うん……何か・家族って難しいね。

美羽 ……。

実果 あ、スマホ、どーだった？

美羽 ああ、着信来てた。

実果 電話してみれば？

美羽 ヤよ。

実果 ・・・あ、そ。あ、そーだ、ちよっと手伝って。(奥に引つ込む)
何？

源造 (奥から野良着に着替えて出てきて)ちよっと出てくる。

美羽 え？山行くの？でも神楽の準備があるって……

源造 ああ、ウチの山じゃなくて。まあ、昼までには帰るから。(縁側で農作業用の靴を履く)

実果 (奥から包みを抱えて来るが、源造に目をやり)房枝さんの畑？

源造 うん……。

実果 私も行こうか？

源造 いや、いい。

実果 そ？じゃあ、いってらっしゃい。

美羽 いってらっしゃい。

源造 (一瞬、美羽を振り返り)うん。いってきます。

源造、庭から出て行く。

実果 あ。(包みをほどこきながら)これ、手伝って。

美羽 何？

実果 今夜の神楽の衣装。うちで預かってるのよ。

美羽 どーすんの？これ。

実果 一応この間虫干ししたんだけど、汚れとか虫食いとかが無いかもう一回確認して。

美羽 あ、ほつれとかあったら、ここ、裁縫箱あるから。

美羽 はあ？

実果 (衣装を広げてチェックしながら)凄くない？昔からのものは、何もかも水害で流されちゃったんで、村の人の記憶や文献を辿って、全く部手作りのよ。(見ているだけの美羽を促して)ほら、早く。

美羽 もう……。(衣装のチェックを手伝い始める)
実果 父さんさ。

美羽 ん？

実果 美羽が泊りに来るの、すっごく楽しみにしてたのよ。一緒にゆっくりご飯食べるなんて、もうずっとなかったじゃない？美羽は特に家出るの早かったから。私が大学入ったタイミングで美羽も出ちゃって。

美羽 ああ。

実果 びっくりしたもんなあ。ド田舎に住んでたのに、いきなり東京の高校受験するって言いい出して。受かったらそのまま私のアパートに転がり込んで。

美羽 早く家出たかったから。・限界だったのよ。家の中はいつも誰かかれか他所のコが入り浸ってて落ち着かなくて。何か・私には自分の「家」が無いみたいっ
てずっと思ってたもん。

実果 ああ……。

美羽 私がいなくなっても、父さんも母さんも寂しくないんだろっうなあって思ってた。

実果 (少し笑って)……。だから来てくれなかったの？
美羽 え？

実果 最後にここに来たのは……。三回忌のときだったでしょ。たまには顔見せてくれればいいのに。

美羽 子どもいると、色々あんのよ。時間、思うようになんないし。
実果 そ。

美羽 ・・(ふと気付いて)ごめん。

実果 何が？

美羽 いや……。

実果 私が離婚してからもう八年経つのお？そんなこと気にしない。

美羽 ・・うん。

庭の外から、歌声が聞こえてくる。

♪私はミカン ミカンの樹

あなたにそっと 届けたい

小倉 博多 道の駅から♪

真実が、銘菓「ミカンの樹」の菓子箱を抱えて庭に入ってくる。

実果 真実ちゃん。

真実 (菓子箱を差し出して)「あなたに届け。銘菓、ミカンの樹」

実果 うわあ。ちょうど食べたいと思ってたの。

真実 津島の道の駅に野菜届けて来たけん。たまにはお菓子もいいかなっち思ってた。

実果 いい、いい。

真実 準備、大変やる。手伝うけん。(当然のように縁側からズカズカと部屋にあがる)

実果 助かる。

美羽 ……。

実果 あれ？松田くんは？

真実 道の駅でそのまま野菜売りよる。

実果 さすが真実ちゃんの子、よく働く。

真実 弟子とかやないけど。あ、ちよつと手洗わせて。(奥へ)

実果 どうぞー。

美羽 準備が大変って？

実果 今日は神楽だから、ウチにいっぱい人来んのよ。

美羽 ウチ？！え？何で？神楽でしょ？神社でやってたヤツでしょ？

実果 神社、流されたまんまだから。

美羽 ……あ、そっか。

実果 今は、(庭の樹を指さして)これが、新しいご神木。だから、毎年、母さんの命日

に合わせてみんなウチに集まって、この樹の前で、神楽をやるようになって。

美羽 それって、法事なんだか神事なんだかわかんないカンジね。

実果 そっか。そーね。

美羽 ……。

真実 (戻ってきて)源ジイは…房枝さんどこ？…(神楽の衣装を見て)これ、

手伝えばいい？(テキパキと神楽の衣装の手エックを始める)

実果 お願い。(菓子箱を指して)これ、開けていい？

真実 うん。野枝さんにも。

実果 (奥へ向かいながら)ありがとう。

真実 (急に気付いて)あ！

美羽 へ？

真実 私…姉妹水いらずんとこ、邪魔したかねえ？

美羽 は？

真実 (美羽に)悪かったね。

美羽 いや…。

実果 (奥から、お供え用の器を持って出てくる)お母さん、今日もご馳走いっぱい。

庭の外に人影が見える。恵である。坂の下の、神社があったあたりを見つめている。

真実 (ふと庭の樹を見つめ)野枝さんの樹。

実果 (器にお菓子盛って供物台に置きつつ)ん？

真実 よう伸びたよね。

実果 そう？

真実 うん。ミカンの樹って、だいたい種から育てるんは難しいんやけど。やっぱ、「始

まりの樹」の子どもやね。

実果 今年も花はつかなかったんだけど。

真実　　そううちつくよ、きつと。
実果　　そーかな。

真実　　うん。野枝さんが、「始まりの樹」の実の種から育てたんやもん。そううち花がついて、そんで、実がなる。
実果　　．．．うん。
真実　　うん。

実果と真実、共通の思い出を噛みしめるように庭のミカンの樹を見つめてい
る。

美羽、落ち着かない様子でいたが、おもむろに立ち上がる。

真実　　？
実果　　どしたの？
美羽　　ちよつと．．．お茶淹れてくる。
実果　　．．．そ。

美羽、奥に引込む。

真実　　（奥の様子を窺って）私、何かいけんこと言ったかねえ？
実果　　ううん。
真実　　そう？

実果　　うん。ただちよつと．．．
真実　　ん？

母さんは、私たちが小さい頃から、私と美羽だけじゃなくて、近所のたくさんの子たちに囲まれてたからさ、母さんのこと思い出すと、その頃の寂しかった気持ちも思い出しちゃうの、きつと。

真実　　そっか。
実果　　そのおかげで救われたこともたくさんあるんだけどね、私も父さんも。そう？
真実　　うん。真実ちゃんとも知り合えたし、みんなとも。

真実　　．．．（嬉しそうに）うん。

ねえ、恵ちゃん、どーしてるかなあ．．．。

真実　　ああ、一応、毎年クラス会の連絡は入れとるんやけどね。神楽んときくらい帰つ
といでつち。

実果　　それで？
真実　　返信無し。
実果　　そっか。
真実　　あんまり誘ってもねえ．．．。
実果　　ん？

恵。去年の合同慰霊祭も来んやったし。妹の七回忌やったんに。

実果 ああ、茜ちゃん……。
真実 もう、ここんこと、忘れたんやつか……。
実果 ……。
真実 (何となく)♪あなた〜に届け〜 ミカン〜の樹〜♪
恵 ヘタクソ。(いつの間にか庭に立っている)
実果 恵ちゃん！
真実 ……。(驚き過ぎて、口がアワアワしている)
恵 真実、酸素不足の金魚みたいになっとうよ。
真実 あああ…。あなた、何しよん？！
恵 何しよんって？
真実 帰るんなら帰るっち、連絡くれればいいやん。
恵 ちよつと気が向いただけやけん。
真実 ずっと、連絡待つとつたんに。
恵 ゴメンゴメン。
真実 「ゴメン」は一回でいい。
恵 はいはい。
真実 ……。
恵 泣きなさんな。
真実 泣いとらん。
恵 ……ゴメン。
真実 ……。
恵 今夜泊めて。
真実 はあ？
恵 しょうがないやん。こっちはもう家無いんやけん。
真実 ……。
恵 ありがとう。
真実 もう……。 (笑う)。

実果、二人の様子を見て微笑む。
「お邪魔しま〜す！」の声とともに、菓子箱を持った明日実が満面の笑みで庭に入ってくる。

実果 明日実さん。
真実 ……。(明日実を見て、明らかに挙動不審になる)。
明日実 (笑顔で) こんにちは。
恵 (真実に) 誰？
真実 へ？いや…。
実果 あれ？午前中は仕事じゃなかった？何だっけ？空き家…。
明日実 空き家定住支援センターです。

実果 ああ、それ。

明日実 今日は神楽があるからお休みって言われて。

実果 ああ、なるほど。じゃあ、あがって。

明日実 いえ、あの・・・(ミカンの樹の菓子箱を差し出して)義母が、これ、持って行け
て。

実果 ・・ああ、ありがとう！

美羽 (お盆に三人分のお茶を淹れて出てくるが、明日実と恵に気付き)あ。・・あと
二つ淹れてくる(とりあえずお盆を置き、奥に戻ろうとする)。

真実 (おもむろに)あー！

美羽 へ?!

真実 (妙に焦って)私・・そろそろ畑行かんと。

実果 そう?

真実 うん!やけ、お茶は要らんよ。(縁側に出てきて、引き彎ったような笑顔で)あ、

明日実さん、こんにちは。

明日実 こんにちは。

真実 あ。その、なんとかセンターのおかげでね、助かつとる。うん。

実果 農業体験の松田さん、頑張ってるもんね。

真実 (実果に)うん、そうそう。(明日実に)まあ、あがってあがって。

明日実 あ、いや・・。

真実 ほら、恵、行くよ。

恵 は?

真実 ほんならまた〜。

真実、恵を連れて縁側から降りようとする。

と、黒い煤すすのようなものが付着したミカンを手にして庭に駆け込んで来る源
造に気付く。

真実 源ジイ?

実果 (源造に向かつて)忘れもの?

源造 (息を切らしながら)いや、「粘着くん」あったか?

実果 粘着くん?(奥に探しに行く)

源造 お、恵!

恵 ども。

真実 どしたん?

源造 おお、スス病が出た。

真実 え?房枝さんどこ?

源造 うん。

真実 原因は?

源造 アブラムシがいっぱい付いとった。

真実 アブラムシか。カイガラムシよりはいつか。
源造 ああ。
実果 (奥から出てきて) 粘着くん、この間使いきっちゃったかも。
真実 じゃあ、ウチから持ってくる。
明日実 牛乳でも大丈夫ですよ。もし、あれば。
真実 ・・あ？
明日実 アブラムシの気門を塞いで窒息させればいいだけなんで、牛乳を水で溶いて散布しても結構効き目あります。
真実 ああ、そーやね。
明日実 牛乳持つてきましようか。
実果 大丈夫。牛乳ならあるから。
美羽 あ、牛乳？(奥へ)
実果 (美羽に向かって) ありがとう。(源造に) たいちゃん家からお菓子いただいたの。
源造 ああ・・(明日実に) すまんすなあ。
実果 昨日も、お酒いただいたばかりなのに。
明日実 なんか・・すいません。
実果 こっちこそ。たいちゃんのお母さん、お父さんにも、あんまり気を使わないでつて伝えてもらえる？
明日実 (少し困って) ・・はい。
実果 今日の神楽、来てくれるかな？
明日実 (表情が曇って) いや・・それは・・。
美羽 (奥から牛乳を抱えて出て来て) 牛乳あったよ。
源造 ・・。
実果 ・・。
美羽 ・・あれ？牛乳・・。
実果 (重大な決意をしたように) 明日実さん。
明日実 はい。
実果 座つて。
明日実 いや、でも・・家戻らないと・・。
実果 すぐ終わるから。
明日実 ・・はい(縁側に腰掛ける)。
実果 父さんも、座つて。
源造 いや、俺は畑に・・。
実果 すぐ終わるから。
源造 はい(縁側に腰掛ける)。
実果 明日実さん。
明日実 はい？
実果 確かに、ウチは、立ち退き拒否してる。父さんが頑張ってるせいで、このヘンの他の家も同調してて、工事が止まってる。でも、それは仕方ないことだよ。だって、私も父さんも、ここにいたいんだもん。それで、たいちゃんが、私たちに、

出て行ってってくれって頼みに来るのも、仕方ないこと。だって、仕事なんかもん。たいちゃんも、県が決めたことを速やかに実行できるようにしてるだけ。だから、明日実さんも、たいちゃんのお父さんもお母さんも、そのことで私たちに申し訳ないなんて思うことないんだよ？たいちゃんだって、ましてや明日実さんが、そんなふうにいることない。ね、父さん。

源造
明日実

あ？ああ、うん。
．．．．

私たちはさ、立場とか、考え方とか、そーゆーのがちよつと違うだけなんだよ。だからって、仲良くしちゃいけないなんてことないでしょ？

明日実
美羽

．．．．
．．．．

実果

簡単なことだよ。だから、（お盆を差し出して）一緒にお茶飲も？飲んで、話をしよう。ね。

源造

（お盆から湯呑みを取り、明日実に差し出して）ほい。

明日実

あ．．．（湯呑みを受け取って）ありがとうございます。

実果

うん。

明日実

（ふと、供物台に「ミカンの樹」がすでに供えられていることに気付いて）あ、あれ？ーあっちゃー！かぶった！

実果

（笑って）いいのいいの。私、これ、大好き。一緒に食べよ。

真実、帰りづらくなり、広げられた神楽の衣装を丁寧にたたんで、片付けな
ど始める。

恵

（小声で真実に）そーゆーこと？

真実

あ？

恵

太一の嫁さんなんや。

真実

うん．．．

美羽

（牛乳を置いて）とりあえずお茶淹れてくるね。

実果

いいから、座ってて。お茶、私、淹れるから。

美羽

でも．．

実果

明日実さん。私の妹だね、美羽っていうの。母親業の大先輩だよ。16歳と13

美羽

歳の子どもがいるんだから。何でも聞いて。（美羽に）ね。

実果

へ？

美羽

ウチによく遊びに来てた太一くんのお嫁さんでね、明日実さん。今、赤ちゃんが

実果

お腹にいるの。相談に乗ってあげて。

美羽

相談って．．．

実果

あとね、たいちゃんと真実ちゃんの同級生で恵ちゃん。ほら、「ミカンの樹」のC

Mの。

明日実

あ、初めまして。お名前は伺ってます。

恵

ども。

実果 このヘン、昼間は、若いヒトはみんな、よそに働きに出ちゃって、村人中、ジジババばつだからさ。話し相手、よろしく。(奥に引込込む)

美羽 (実果に向かって) あ、ちよつと待って・・・

明日実 (美羽に) あの・・・よろしくお願いします。

美羽 え? いや、あの・・・今、何ヶ月?

明日実 もうすぐ5ヶ月です。

真実と恵、神楽の衣装を畳みながら聞き耳を立てているようである。
源造は、お茶をすすっている。

美羽 初産?

明日実 はい。

美羽 つわりとか。

明日実 あ、だいぶおさまってきました。

美羽 そう。あ、こっちで産むの?

明日実 え?

美羽 ご実家とか。

明日実 あ、私、もう実家無いんです。父も母も亡くなって。

美羽 あ・・・ごめんなさい。

明日実 いえ。ここには、夫の義父と義母がいるんで。

美羽 え?同居?

明日実 はい。

美羽 まあ・・・。

明日実 (笑って) 義父も義母もホントによくしてくれるんですけど、何しろ情報が古くて、だから、ちよつと心細かったんです。

美羽 大変ねえ。

明日実 いや。カルチャーギャップがギャップ過ぎて、それはそれで結構楽しいんですけどね。

美羽 そうなの?

明日実 はい。

実果 (お茶の仕度をした盆を抱えてきて) どう?話はずんでる?..

美羽 はあ?

実果 (真実が持って来たミカンのお菓子をお菓子を配りながら) これ、食べちゃおう。明日実さんが持って来てくれたヤツは、夜、みんなで食べる。ね。はい、父さんも。

源造 あ?ああ。

実果 あれ?妊婦って甘いモノいけなかったんだっけ?

美羽 食べ過ぎなきゃ大丈夫。

実果 そう?

美羽 私もよく食べてたし。むしろ甘いモノしか食べたくない時期とかあって。

明日実 あ。

美羽 やっぱり？

明日実 はい。

美羽 つわりのときとか、ご飯の匂いかぐのもムリで、食べれなくてフラフラしてんのに、「あ、あのお店のあんドーナツ食べたいー」とか思ったら、そのお店まですごいスピードで歩いていけたりするの。

明日実 ああ、はい、そーです！

実果 私はタコ焼きだったなあ。

美羽 え？

実果 つわりの時。他のモノは何にも食べれないのに、「あ、タコ焼き食べたいー」と思ったら、バスに乗ってまで買いに行ってた。

源造 ……。

美羽 ……。

実果 私ね、妊娠はしたことあんのよ。育たなかったけど。だから、妊娠中の話なら、ある程度相談に乗れる。不育症って言ってね、赤ちゃん、私の、お腹じゃ育たないんだって。

美羽 え……？

明日実 ……。

源造 ……。

実果 (源造に) 大丈夫よ。

源造 あ？

実果 赤ちゃん産むことはできなくてもさ、育てることはできるんだあつて。ヒトでも、動物でも、野菜でも。この村に来てさ、ホントにそう思えるようになったんだから。

源造 ……ああ。

美羽 ……。

実果 明日実さんも。ヘンな気使わないでね。

明日実 え？

実果 私、ホントに楽しみにしてるんだから。明日実さんと、たいちゃんの赤ちゃん。だから、いつでも寄って。一緒にお茶飲もう。ね。

明日実 ……はい。

実果 あ！お父さん、房枝さんの畑！

源造 あ！

実果、源造の慌てた反応を見て笑う。

源造、実果を見つめる。

五場 種を植える

十二年前。九月始め。午後。佐伯家。

野枝の声が聞こえてくる。実果と電話で話しているようである。

野枝　もしもし。うん。今、家に戻ったと。退院退院。大丈夫よ。もうすっかり元気ん？やだ。わざわざ来なくていいから。うん。実果ちゃんもお仕事大変でしょ。まだまだ暑いから、しっかり水分取って。身体に気をつけてね。

源造、野枝の入院時の荷物を抱えて庭から入ってくる。

源造　実果か。

野枝　うん。

源造　美羽には？

野枝　美羽には先に電話しといたの。たつくと優ちゃんがお昼寝する前にと思ってた。そうか。

庭に、恵と、中学の制服姿で学生カバンを抱えた竜太・哲男・菜摘・千尋・麻衣・茜・佐智、高校の制服姿の隼人が、口々に「野枝ー！」と言いながら駆け込んでくる。

野枝　みんな！恵ちゃんも！どーしたの？

恵　野枝さん、今日退院つち聞いて、博多から飛んで来た。

千尋　野枝。

野枝　ん？

麻衣　もう大丈夫なん？

野枝　うん。大丈夫。

菜摘　あのねあのね。

茜　凄いの見つけた。

佐智　見て。

野枝　何？

子どもたちが竜太の方を見る。

竜太、大事そうに握りしめていたものを差し出す。ミカンである。

野枝　ミカン？

野枝、ミカンを受け取る。

隼人　ただのミカンやないよ。

野枝　ん？

千尋　できとつたと。

野枝　え？

茜 始まりの樹に。
麻衣 ミカンができとったと。
野枝 始まりの樹に？
菜摘 うん。
野枝 いくつか花がついとったんは知っとったけど。
佐智 そううちの一つ。
竜太 食べり。絶対元気になるけん。
茜 食べり。
麻衣 始まりの樹のミカン食べたたら、絶対元気になるっち、婆ちゃんがよう言いよった。
哲男 うん。
野枝 みんな……。ありがとう。（ミカンを大事そうに押し戴く）
子どもたち うん。
恵 あんまり長居したら、身体にさわるといけんけん。
隼人 ほんなら、帰ろう。
千尋 うん。
佐智 野枝、また来るけん。
野枝 うん。おいで。
竜太 源ジイ。
源造 ん？
竜太 野枝、ようなるよね。絶対ようなるよね。
源造 うん。絶対ようなる。
竜太 ……ほんなら、また来るけん。

子どもたち、口々に「またね」「バイバイ」などと言いながら、庭から出て行く。
それとすれ違うように、真実が駆け込んでくる。

真実 野枝さん！
野枝 真実ちゃん。久しぶり。
真実 野枝さん、ホントに退院したんやね。
野枝 うん。
真実 これ！（瓶に詰めた蜂蜜を差し出す）
野枝 これ……。？
真実 蜂蜜。ウチで採れた、初めての蜂蜜。
野枝 うわあ！
真実 食べて。
野枝 ん？
真実 野枝さんに食べて欲しい。始まりの樹の花の蜜も入っとるはずやけ。絶対元気になるけん。
野枝 そんな大事なもの……。

真実 食べて。

源造 お前に食べさせたいち大事に取っとつてくれて。

野枝 ……ありがとう。ほんなら、遠慮なく。

真実 うん。絶対食べて。

野枝 うん。食べる。

房枝が庭にスタスタと入ってくる。

房枝 これ。(新聞紙に包まれたものを、野枝に向かってぶつきらぼうに差し出す)
へ?

野枝 自然薯。

真実 (驚いて) 自然薯?

房枝 裏ん山に生えとったけん。

真実 掘ってきたと?

房枝 精がつくって言うけん……。(野枝に) 食べり。

野枝 え?

房枝 食べりっちゃ。

野枝 (房枝が差し出した包みを受け取って) ありがとう。

真実 これ、掘るん大変やったやろ。

房枝 ……。(不機嫌そうに) 絶対食べりいよ。ちやくんと元気にならんと、承知せんけんね!(くるりと後ろを向いてスタスタと去る)

真実 あ、房枝さん。

房枝、行ってしまふ。

真実 房枝さん……

野枝 ん?

真実 今年は、農薬、撒かんどつてくれたと。

野枝 農薬?

真実 うん。近くで農薬撒かれたら、蜂が騒ぐけん、できるだけ撒かんで欲しいいち頼んだら。

野枝 そう……。

真実 農薬使わんで米育てるんは、手間もかかるし大変っち思うんやけど。

野枝 うん。

真実 あ、ごめん! 退院してきたばかりなのに、長居して。もう行くけん。
なくん。大丈夫よ。ゆっくりしてつて。

野枝 畑行かんな。

真実 そう?

野枝 また寄るけん。

真実 うん。

真実
源造 ほんなら、源ジイ、また。
おう。

真実、出て行く。

源造 なんか・・・
野枝 ン？

源造 こん村には、地蔵さんがいっぱいおるのう。

野枝 地蔵さん？

源造 野菜貰うたりミカン貰うたり・・・。

野枝 ・・ああ、笠地蔵。(もらったミカンをながめて) 始まりの樹のミカン・・・。

源造 ミカンの樹は、古くなってくると、あんまり実をつけなくなるって聞くけど、今

年は豊作か。

野枝 キレイ。(皮を剥き始める。鮮烈な甘酸っぱい香りが野枝の鼻腔をくすぐる)・・・
いい匂い。

源造 (しばらく、香りを楽しむ野枝の顔を見つめていたが)・・・野枝。
野枝 ン？

源造 今まで・・・俺は自分の仕事が好きだった。ダムを造ったり、橋をかけたたり、道が無かったところに道を造ったり。そうやって、人の暮らしが便利になっていくことは、いいことだと思ってた。けど、・・・野枝、話がある。

野枝 何？

源造 ここに、高速道路が通る計画がある。

野枝 高速道路？

源造 九州の海沿いを北から南までつなぐ計画で、その認可がおりれば、猿ヶ実村のど真ん中を道路が突っ切ることになる。小学校も神社も始まりの樹も、この家も、立ち退きのエリアに入っとる。

野枝 立ち退き・・・。

源造 嫌だと思った。この計画は、いいことだとは思えん。俺・・・今の仕事、辞めようと思う。

野枝 ・・・・ヤだ。

源造 は？

野枝 立ち退きなんてヤだ。それって、無くなるってことでしょう？竜ちゃんや千尋ちゃんや麻衣ちゃんや・・・みんなが通ってたあの小学校が、村神楽やってる、大事な神社が、無くなるってことですよ？そんなのヤだ。

源造 ンあ？あ、ああ。

野枝 源造さん。

源造 はい。

野枝 辞めよう。うん。そんな仕事、辞めた方がいい。

源造 いや、辞めるって話を今・・・

野枝 え？そーなの？

源造 うん。

野枝 なんだー、よかった。

源造 いや……。

野枝 (笑い出して) どしたの？鳩が豆鉄砲くらったような顔。

源造 いや・・・普通、亭主が仕事辞めると言ったら、女房つてのは慌てるもんじゃないのか？

野枝 そーなの？何で？

源造 仕事辞めたら、食ってけなくなるだろう？

野枝 じゃあ、私が働く！賄いならできし。

源造 ああ、昔、飯場で賄いやつてたときみたいに？

野枝 そう！

源造 確かに。初めて飯場で食った野枝の飯はうまかった。

野枝 でしょ？

源造 (笑って) 野枝。俺は百姓をやろうと思う。

野枝 百姓？

源造 その坂登ってつたとこの、山田さん家。

野枝 ああ、山田ん山つて子どもたちが言ってる。ミカンとか栗の樹があつて。

源造 うん。畑やめて北浜の街の方に引っ越したいって言ってる、山の買い手を探してる。

野枝 「息子の世話になりたくないから、街で介護施設探す」って言った。

源造 その山、買おうと思う。この家も買い取るように大家と交渉する。退職金がいくらか入るし、山田のオヤジさんも、しばらくはここにいて色々教えてくれるっていうし。

野枝 源造さん！

源造 ん？

野枝 なるだけ高く買ってあげてね！

源造 お？お、おお。

野枝 良かった。

源造、急に居すまいを直す。

野枝も慌てて正座する。

源造

今から百姓なんて、やっていけるのかどうかわかん。食っていくのがカツカツになるかもしれん。もしかしたら、食っていくこともできんかもしれん。それでも、一緒に暮らしてくれるか？俺と、この村で、一緒に暮らしてくれるか？

野枝 ……(おもむろに吹き出して) なくに？源造さん、真剣な顔しちやつて。可
つ笑しい。

源造 ……。

野枝 そんなの当たり前でしょ。わざわざかしまつちやつて。へ〜んなの。

源造 へんか……。

野枝 うん。へん。

源造 実果や美羽のそばで、暮らしたいとは思わんのか。

野枝 実果も美羽も、もう大人でしょ。あのコたちには、あのコたちの人生がある。

源造 そうか。

野枝 うん。あゝ、笑ったら喉かわいちゃった。(手にしたミカンに礼をして)いただきます。(ミカンを口に入れ、食べ始める) 美味しい。(ミカンを半分こにして差し出し) はい、源造さん。

源造 ん？

野枝 美味しいものは、一緒に食べよう？

源造 ああ。(ミカンを受け取り) やっぱり野枝は面白い。

野枝 そお？ん！(口を押さえる)

源造 どうした？！(慌てて野枝に駆け寄る)

野枝 ・・・・種。

源造 は？

野枝 ミカンに種入ってた。

源造 種？

野枝 (種を見せて) ほら。・・・始まりの樹の実の、種。

源造 ああ。

野枝 ・・・・ねえ。

源造 ん？

野枝 私、この種、植えてみようかな。

源造 植える？

野枝 そう。種を植えて、お水をあげて。そしたら、ちっちゃな芽が出て、どんどん伸びて、いつか樹になるでしょ。あつたかくなったら白い花が咲いて、夏には涼しい木陰を作って、それから、まるーい実をつける。そしたらね、みんなが、もいで食べてくれるの。素敵だと思わない？いつか、私がいなくなっても、子どもたちや、そのまた子どもたちや、たつくさんのコたちが食べてくれる。

源造 ・・・・ああ。

野枝 源造さん。

源造 ん？

野枝 私も、お百姓やるからね。ミカンや、栗や、お野菜や。・・・一緒に、たつくさん育てよう？

源造 おう。

二人、笑い合う。

月がめぐり、翌年。十月始め。佐伯家。

庭で、源造が、骨壺を手に灰を撒いている。

弁当箱を抱えた竜太が庭に入ってくる。

源ジイ。何しよるんか。

源造

源ジイ。

源造 ……花咲かじじいしよった。

源造

「枯れ木に花を咲かせましよう。」(灰を撒く)

源太 それ…野枝の骨壺…(源造が何を撒いたのかを悟って駆け寄り)やめんか。

源造 ……(うなだれている)。

源太 ……(弁当箱を見せて)これ、母ちゃんが持っていけっち。ウチの新米で炊いた

ヤツ。無農薬やけん。…ちゃんと食いよるんか？源ジイが食うのを見届けるまで帰ってくんな言われたけん。

源太、弁当箱の中のおにぎりを取り出し、源造の目の前に差し出す。が、源造は受け取る気配が無い。

源太は源造の手を取り、おにぎりを持たせて口もとに誘導する。
源造、おにぎりを見つめ、食べようと口を寄せるが、涙が零れる。

源造 ……。

源太 源ジイ…。

源造 竜太。

源太 竜太？

源造 野枝がおらん。…野枝は、もうおらんのやなあ…。

源太 ……。

月が出る。

神楽のお囃子の音が聞こえてくる。

六場 太一、源造を訪ねる

女の唄う声が聞こえてくる。

♪一つ ひととせ巡りきて

ふた世の橋 実ばつけて

みそぎの川に 香る頃

黄泉比良坂戸よむつひらびらかん開けて

急ぎ帰りち 火ば灯す

六つ 暮れ六つ告げる鐘

なんぼ戻りの 遠かると

山ん寝仏 目指し来い
こんこん待つとる ウチん声
とんとんとんから おらびよる♪

村神楽の日。昼過ぎ。

佐伯家の庭。

実果が、猿ヶ実数え唄を唄いながら、供物台にお供え物を並べている。

美羽は、それを見つめている。

美羽 その唄、なんの唄？

実果 この村の数え唄。十番まであつてね。今は五番と六番。神楽の日に唄うの。あの世の魂が、村神楽の日に、待ってる人のところに迷わず戻りますようにって。魂？

実果 この村では、村神楽の奉納の日には、亡くなった人たちの魂がこの世に戻つて来て、生きてる人たちと一緒に村神楽をするんだって言われててね。だから、生きてる人に戻つて来てる魂が、一緒に食べたり飲んだりできるように、ご馳走たくさん作つたりお供え物を用意したり。

源造、手ぬぐいで汗を拭き拭き、外から庭に入ってくる。

源造 表の飾りつけ、終わったぞ。

庭の外側には、盆提灯のような提灯が飾られ、道沿いの樹々に張られた縄には、赤や白、緑などの鮮やかな紙垂が下げられている。

実果 (飾りの様子を確認して) うん。よし。

美羽 (飾りを見つめて) 綺麗。なんか・お盆みたい。

実果 ああ、お盆みたいかも。

源造 ちよつとひとつ風呂浴びてくる。

実果 お父さん！ちゃんと服着て出て来てね。今日はみんな来るんだから、ステテコだけなんてやめてよ。

源造 はいは〜い。(縁側から上がり、奥に引込む)

美羽 お姉ちゃん。

実果 ん？

美羽 さつきの話・不育症って・。

実果 ああ、うん。・何度か流産して、詳しく検査してみたら、子宮に異常が見つかった。手術もしてみたんだけどね、授からなくて……。だからね、私、自分の血の繋がりがある家族は、もう作れないの。

美羽 じゃあ、お姉ちゃんが学校の先生辞めたのって・。

実果 ・。まあ、正直、子どもたちの声聞いているのも辛い時期もあったから。生徒た

美羽 ちのこと、かわいいつて思ってたはずなのに……。心狭いんだなあ、私ってごめん。

実果 は？

美羽 私、何にも知らなくて、お姉ちゃん家、何度もウチの子たち連れてって……。しようがないよ。私、話してなかったし。怖かったのよ、たぶん。

美羽 え？

実果 誰かに話すと、私は自分で子どもを生めないんだって、自分の家族を作ることばできないんだって、認めちゃうような気がして……。

美羽 ……。

実果 でもね。

美羽 ン？

実果 私……この村で暮らすようになって、なんか……家族が増えたような気がしてるの。血の繋がりがあるとかないとかじゃなくて……美羽のことも父さんのことももちろん大事だけど、真実ちゃんも、竜ちゃんも、房枝さんも、ウチに出入りしてる人はみんな、おんなじように大事な……家族。まあ、家族って言葉が正しいのかどうかわかんないけど。

美羽 ……。

実果 毎日どっかで顔合わせて、時間があればお茶飲んだりお漬物つまんだりして、誰か家で困りごとがあれば誰かが駆けつけて……。面倒くさいと思うこともあるけど、そーやって……一緒に暮らしてるんだなあって。

美羽 お姉ちゃんの……家族。

実果 うん。美羽の言う通りかも。

美羽 え？

実果 「みくんなおんなじ」って言った母さんの気持ち、ちょっとわかる気がする。……。

タツパを抱えた明日実が、「あゝ」と言いながら、庭に入ってくる。

実果 明日実さん。

明日実 たびたびすみません。(タツパを差し出して)これ……がめ煮、たくさん作ったから持ってきて義母が……。

実果 (笑って)ありがとう。たいちゃんのお母さんがめ煮、美味しいのよね。神樂が終わったら、みんなでいたただこう。

明日実 なんか……ホント何度もすみません。

実果 あ、上がってって。一緒にお茶飲も？

明日実 でもさつきも……

実果 今度のは、三時のお茶。

明日実 (笑って)はい。お邪魔します。

実果 うん。

美羽 どうぞ。

庭に、スナック菓子の袋を手にした佐智が入って来る。

実果 佐智ちゃん。

佐智、小さく会釈する。

実果 昨日は収穫手伝ってくれてありがとう。

佐智 これ。(スナック菓子の袋を差し出す)

実果 ん？

佐智 みんな・・これ、好きやったけん。今日は黄泉比良坂越えてみんながこっちに戻って来る日やけん、(供物台を指して)一緒に供えてやって。

実果 ありがとう。(袋を受け取る)

佐智 ・・ほんなら。(出て行くこうとする。)

実果 佐智ちゃん？

佐智 (立ち止まり)・・私、神楽には出られん。

実果 え？

佐智 こん村出て行くモンが、神楽に出るワケにはいかん。(走り去る)

実果 佐智ちゃん・・。

明日実

美羽 あのコ、どしたの？

実果 うん・・。生き残った者の責任、感じてるんだろうなあ・・。

美羽 行き残った者？

実果 うん。佐智ちゃんと竜ちゃんと、昨日一緒にいた菜摘ちゃんと哲男くんは同級生でね。他にも三人いたんだけど、三人とも七年前の水害で亡くなっちゃって。避難してた公民館に山崩れが来てね、お年寄りたちを助けようとしてたんだって。自分たちだけ先に逃げてれば助かったんじゃないかって聞いたけど。千尋ちゃんは見護士さんになりたいてって言ってたし、麻衣ちゃんは保育士になるって言ってたから、自分たちだけ逃げるなんてできなかったんだろうなあ・・。(スナック菓子を大事そうに供物台に供えて)茜ちゃん、麻衣ちゃん、千尋ちゃん。佐智ちゃんがお菓子持って来てくれたよ。

明日実 ・・。

実果 明日実さん。

明日実 はい？

実果 気にしない。佐智ちゃんが出ていくのは、明日実さんのせいでも、たいちゃんのせいでもないよ。

明日実 ・・。はい。

実果 (ふと)私の赤ちゃんも、お菓子食べてくれるかな？

美羽 え？

実果 こっちでは、おっぱいも何にも飲ませてあげらんないうちにいなくなっちゃった

から。(ミカンの樹に向かつて) 向こうでは、ご飯とかお菓子とか、たんと食べられますように。

美羽　・ ・ ・ お姉ちゃん ・ ・ ・ (実果を見つめる)。

房枝が、米や野菜が入ったコンテナボックスを抱えてスタスタと庭に入ってくる。

実果　ああ、房枝さん。

明日実　こんにちは。

房枝　(コンテナボックスを見せて) これ。さっき、源造さんに畑手伝ってもらったん。

実果　アブラムシ、大変だったね。

房枝　何かしてもらってばかりは、すかんけん。

実果　ありがとう。いつも助かってる。お米とかお野菜とか。

房枝　ウチん子が、ようけ食べるやろうけ。

実果　ああ ・ ・ ・ 。

房枝　何でやろうねえ。

実果　ん？

房枝　本人も大学行きたいっち言うし、大学行かしてやれば、こんな畑仕事とかせんでいいやろうっち思うて行かしたら、卒業しても就職もせんで、フリーターかなんか知らんけど街でプラプラしとって。たまに帰って来たと思ったら、よそん家にばっかり入り浸って。

実果　・ ・ ・ 。

房枝　昔つからそうやったね。あんコの父親が死んでからずっと。

実果　房枝さん ・ ・ ・ 。

房枝　どうしたらいいんやろうねえ。自分のコなんに、どうやってしゃべったらいいんか、何してやったらいいんか、わからん。何でやろう ・ ・ ・ 。

美羽、房枝を見つめる。

実果　・ ・ ・ 親子だからじゃないかな。

房枝　あ？

赤の他人になら言えるけど、親子だと言えないことってあるじゃない。私もね、母さんに言えなかったこと、いっぱいある。

美羽　・ ・ ・ 。

房枝　・ ・ ・ 。

実果　いいんだよ。親子だからできないこととか言えないこととか、そーゆーのは、親じゃないヤツに任せちゃえばいいんだよ。全く部自分一人で背負えるワケないんだからさ。でもきつと、親じゃなきゃできないことがある。そんな時だけ、頑張ればいいんだよ。

房枝 ……。

実果 ゴメン。なんかエラソーに。けど・私、そりゃあ子どもはいないけど、子ども
だったことあるからさ。

房枝 ……。ここに置くけんね。(運んできた米や野菜のコンテナを、縁側にひよいと上
げる。)

実果 うん。あ、美羽、ちょっと手伝って。

美羽 え？

実果 これ(コンテナ)、台所に持ってって。

美羽 ああ、うん。(コンテナを持ち上げようとして)重っ。

明日実 あ、私、運びます。

美羽 ダメよ、そんな重いもの、妊婦さんが…

明日実、コンテナをひよいと持ち上げる。

美羽 へ…？

明日実 私、昔、井戸掘ってたことあるんで、こんなの平気です。(奥へ向かう)

美羽 井戸？え、今どき？

明日実 (奥から声のみ)あ、海外なんで。

美羽 海外？

明日実 はい。ダンゴル村ってところで。

美羽 ダンゴ…？え、どこ？

明日実 中央アフリカの方です。

美羽 中央アフリカ…。

美羽、「どーゆーこと？」と言いたげに実果を見る。

実果、首をひねり、房枝を見る。

房枝、「私は知らない」と言うように困惑した顔で手を振る。

明日実、空のコンテナボックスを持って戻って来る。

明日実 あれ？なんか妙な空気にしちゃいました？

美羽 いや、ちよつとびっくりしちやつて…。だって…何でまた中央アフリカの…

ダンダンダン…。

ダンゴル村です。

明日実 何でそのダンゴル村で井戸を？

明日実 まあ、きっかけは、緊急避難みたいなもんです。寝床と食べる物貰えるって言う
んで。

美羽 ？

明日実 ウチ…もともとそこそこビンボーだったんですけど、高校の頃に父親死んじゃ
って、そしたら、立派なビンボーになっちゃって。奨学金で何とか大学には行け
たんですけど、そろそろ就活始めようかなって頃に母親も死んじゃって、いきな

美羽 うん。
り天涯孤独かよって。奨学金も返さなきゃなんないし、一人で家賃払って食ってくのかーって思ってたら……。

明日実 大学の就活センターにポスター貼ってあったの見たんです。「ダンゴル村井戸掘りプロジェクト！職員募集！」近くに水源が無い村の子どもたちが、片道2時間かけて水を汲みに行っています。是非、あなたの力を貸してください」ああ。

明日実 スゲー！水汲むために2時間かー。私より酷い生活じゃんって。行って、見てみようって。食事も家も提供してくれるっていうし、その場で応募してで、行ったの？

明日実 はい。畑仕事手伝いながら、井戸掘ってました。

美羽 よくそんな・中央アフリカなんて……。

明日実 っー・・・優越感に浸りたかったんですね。

美羽 優越感？

明日実 はい。私より酷い状況の人たちを見て、なんだ、私、大してツラくないじゃんって、安心したかったです、きっと。でも……

美羽 っ？

明日実 豊かでした。

美羽 え？

明日実 水汲みに片道二時間かかるようなとこだったけど、なんか・豊かでした。ヤギがいて、鶏がいて、畑があつて。調理場が屋外にあるんで、みんなで一緒に料理するんですけど、出上がった料理は、みんなで一緒に食べるんです。一つの皿に盛った料理をみんなで分け合つて、家族とか家族じゃないとか関係なくて、その場にいる人みくんおんなじように分けて。ちょっと、この村に似てるかも。

美羽 ……。

明日実 美羽さん？

美羽 ……娘がね。

明日実 え？

美羽 高校生の娘が、留学したいって言つて、今、必死でバイトしてるの。将来は海外の・・いわゆる発展途上国のNGOだから働きたいって。私、どうしたらいいかわかんなくて。何でそんな海外の、しかも危険そうな不便な場所に行きたいって思うのか……。

明日実 「ファミリア バーダヤ カロ パモージャ」って言葉があつて。

美羽 え？

明日実 ダンゴル村の・諺みたいなもので、「一緒に食事したら、もう家族」って意味なんですって。村に行つたばっかの頃、大人数での食事に慣れなくて遠慮してたら、そう言われて。

実果 なんか、ウチの母さんが言いそうな言葉ね。「一緒に食事したら、もう家族」。

美羽 ホントだ。

明日実 娘さんがどうして急に海外に興味を持ったのかはわかりませんが、でも、私

は行ってみてホントに良かったって思ってます。今でも時々思い出すんですよね、地球の裏側にいる私の家族たちは元気かな〜って。

美羽

あ、なんかすみません！私、エラソーに……。

美羽 ううん。ありがとう。なんか……ありがとう。

明日実 いえ。私も、お話できて嬉しいです。

庭に、竜太が入ってくる。房枝に気付いて、出て行こうとする。

房枝 いいけん。

竜太 ?

房枝 私が出て行くけん、あんたは行かんでいいけん。

竜太 ……。

房枝 お遊びの土いじりは、そろそろいい加減にしいよ。源造さんにも迷惑やけん。

実果 ウチは、凄く助かっているのよ？

房枝 いつまんでもプラプラしとるワケにはいかんのやけ。ちゃんとしたとこ就職してもらわんと。

竜太 ……プラプラしとるワケやない。

房枝 あ？

竜太 俺は、プラプラしとるワケやない。

房枝 (何事か思い当たり) あんた……。

竜太 ……。

房枝 ……お邪魔さん。(出て行こうとする)

実果 房枝さん。神楽、来てね。

房枝 ……。(去る)

竜太 ……。(房枝を見送る)

明日実 (空のコンテナボックスが置きっぱなしなのに気付き) あ、竜太くん、これ、房枝さんに……。(コンテナボックスを差し出す)

竜太 ……。(コンテナボックスを受け取らず出て行く)

明日実 あ……。

美羽 (出て行く竜太を見つめている) ……。

実果 明日実さん、私、持っていくから。

明日実 いや、実果さんはここにいないと。私、届けてきます。

実果 そう？悪いわね。

明日実 行ってきま〜す。(庭から出て行く)

美羽 (ため息をつく)

実果 ん？

美羽 次から次へと……。賑やかかって言うか面倒くさいと云うか。

実果 まあね。

玄関から、「ごめんください」と声がする。

実果 おや、玄関から人が。

美羽 それ、フツーだから。

実果 そっか。(玄関に向かって) はい。(玄関の方へ)

玄関から「たいちゃん。上がって」と声がする。

実果が、太一を伴って居間に入ってくる。

実果

(太一に) 妹の美羽。美しい羽って書いて、あ、今、東京から来てて。(美羽に) 近所に住んでる、太一くん。あ、明日実さんの……。

美羽

ああ。

太一、慌てて会釈をする。

実果

(奥に向かって) 父さくん。父さくん。

源造

(ステテコをはいて出て来て) あ？

実果

たいちゃんが……(ステテコを見咎めて) 父さん、もう……。

源造

(実果のことは気にせず、太一に向かって) おう。

太一

(会釈をして) 今日は、県の土木整備部の担当者として、立ち退きのお願いにま

源造

まあ、座れ。

太一、かしこまって座る。

実果、源造と太一の様子を気にしつつ、奥へ。

美羽も奥に引っ込もうとする。

源造

美羽。

美羽

ん？

源造

お前も座ってくれんか。

美羽

でも……。

源造

ここはお前の家でもあるんだから、一緒にいて欲しい。

美羽

……。(座る)

太一

佐伯源造さん他三十二名の方々による事業認定事前差し止め訴訟ですが、県の勝訴が確定しましたことを受けまして、改めて立ち退きのお願いに参りました。

源造

県の勝訴は、まだ決まっとらん。上告の手続きしたけん。

太一

県では、しかるべき補償金をお支払いする用意があります。この猿ヶ実村の発展のためにも、是非、高速道路建設にご賛同いただいで、速やかに立ち退きに応じていただけますよう……。

源造

発展ち何か。道路ができたら村が発展するんか。

太一 東九州湾岸線が全線開通すれば、物流がより迅速になることが予想されることにより、村の海浜部に優良企業の工場等の誘致が見込まれ、また、サービスエリアの設置により雇用の創出が・・・

源造 太一。ちゃんと話さんか。

太一 ……。

実果が、お茶の用意をして奥から出てくる。

源造 お前、こん道路は、本当に村のためになるっち思うとるんか。

太一 ……思うとる。高速道路ができることで、人が減って行くばかりやったこの村は、救われるち思うとる。

源造 移動時間がほんの何十分か短くなるだけで、ホントに企業誘致ができると思うとるんか。サービスエリアができて人が来るっち言ったって、たかがしれとるやろうが。今は、下道通って道の駅に寄りよう人たちも、高速通ったら、みんなこの村を素通りするようになる。そうは思わんか。

太一 ほんの何十分かでも移動時間が短くなれば、ここから街に出やすくなる。畑やめて、こつから街に働きに出ればいい。サービスエリアができれば、そこでも働ける。買い物もできる。バスも通らんことなったこの村が、確実に便利になる。

源造 太一。お前、そんな便利が欲しいんか？人追い出して、今までの暮らし全部ぶっ潰して手に入れる、そんな便利が欲しいんか？

太一 ……もう、決まっとることやけ。

源造 あ？

太一 この話は、県だけの話やない。国が、ここに道路を通すっち、もう決めてしもたことやけん。猿ヶ実村は、朽ちて行くばかりのこんな小さい村は、もうこの国には要らんっち。俺らが言うこととか、聞く耳持つとるワケないやん。上告しても、却下される。

源造 そしたらまた別の裁判を起こす。

太一 今やったら、補償金を受け取って、平地ん方行って農業を続けることもできる。けど、もしこのまま居座り続けて、行政代執行ってことになったら、取り壊しに關わる費用とか何かかんが理由つけられて金請求されることになる。

源造 こん山をへ々に切り開いたら、地下水脈が変わって、平地の畑にも影響が出るんやないかと思ひよる。こん山に手入れたら、この辺の農業・・・もしかしたら、漁業にも、大きな影響が出るかもしれ・・・

太一 それは仮定の話やろう。

源造 ……太一。お前、こん村追い出されて、平気なんか？

太一 ……俺は、もう街に引越すことに決めた。

源造 ……。

太一 父ちゃんも母ちゃんも年取って、街におった方が何かと便利やし・・・。

源造 本当にもうどーしようもないっち思つとるんか。上が決めたことには従うしかない、そう思うとるんか。

太一 ……
源造 俺は、七年前の山崩れは、へ々に山切り開いたせいやないかと思うとる。千尋と

麻衣と茜と…公民館に避難しとった人たちが死んだんは、この工事のせいや
と思うとる。

太一 ……(苦渋の色を浮かべる)。

源造 きつちいのう、太一…。

太一 ……。

源造 俺は、ここを動かん。補償金を受け取るつもりもない。(庭の樹を見つめて)あの
樹を、引っこ抜いたりさせん。

太一 ……今日のところは、これで失礼いたします。また、上告の件も合わせまし
て、ご連絡させていただきます。

源造 ……太一。

太一 ?

源造 また来い。

太一 ……。

源造 俺とお前は、立場が違う。考え方も、もしかしたら違うんかもしれん。けど、ま
たメシ食いに来い。お前と、メシ食って、酒飲みたい。今夜の神楽も、待つとる
けん。

実果 たいちゃん…。

太一 ……。(玄関の方へ去る)

実果 ……。

源造 実果。

実果 ……。

源造 弁護士増やそうと思う。こつから先は、頼りにできる専門家がおらんと。

実果 上告するのね。

源造 ああ。

美羽 上告って、お姉ちゃんと父さんが裁判やるの？父さん、昔は逆の立場だったよね。

源造 もう工事もここまで進んで、これで計画が中止になるなんてことあった？

源造 いいんだ。

美羽 え？

源造 結果的に、工事が中止にならんでも、それはしょうがない。けど、それは不本意
だということはい続けんと。黙っとつたら、国が決めたことにはすべて従いま
すつてことになる。それが当たり前になる。自分が、どこに住んでどうやって暮
らしていくんかは、自分で決めたい。誰かに、あつち行けって言われて、その通
りにするんは…すかん。嫌なものは嫌、おかしいことはおかしいって、言い続
けんないかん。

実果 わかった。

源造 色々と物入りになるかもしれんが…。

実果 うん。美羽。

美羽 ……？

実果 私たちつてさ、引越しには慣れっことで、人と別れたり出会ったりすることにも慣れてるじゃない？

美羽 うん。

実果 けど。今度のは違うの。今までは、私たちが引越しても、残った人たちの暮らしはそのまま続いてた。でも、ここに道路が通るってことは、みくんないなくなっちゃうってことなの。今のこの暮らしが全部無くなっちゃうってことなの。だからね、私、絶対、ここ、立ち退きたくないの。

美羽 そっか。・・・何か・・・
実果 ん？

美羽 立ち退き拒否って、もっと特別なひとたちがやることだって思ってた。

実果 ・・・・ああ、そっか。そーよね。私たちつて、「立ち退き拒否してる人たち」なんだ。

美羽 でしょ？

実果 ・・・・へ〜んなの！

美羽 へ？

実果 ただ日々暮らしてるだけなのに、おんなじようにこれからも私たちの家で暮らしていきたくって思ってるだけなのに、特別ヘンな人みたいに言われるの、へ〜んなの！

美羽 お姉ちゃん。

実果 ん？

美羽 それ、お母さんそっくり。「へ〜んなの」って。(源造に) ねえ。

源造 ん？ああ・・・。

実果 ええ？そう？へ〜んなの。

明日実が庭に立っているのが見える。

実果 あ、明日実さん。お帰り。

明日実 いえ、あの・・・なんか・・・すいません。

実果 聞いてたの？

明日実 ・・すいません。

源造 あんたが謝ることはない。いっちょん気にせんでいいけん。

明日実 ・・ありがとうございます。私、そろそろ帰りますね。夜、神楽に伺います。

実果 うん！

美羽 待ってるね。

明日実 はい。

明日実、庭から出ていく。

恵が庭の外にふわりと姿を現し、坂の下の神社があつたあたりを見つめながら、ぼんやりと歌を口ずさむ。

恵

♪私はミカン ミカンの樹

あなたにそっと 届けたい

金色の 甘い ミカン

あなたに届け この想い

あなたに届け(途中で歌えなくなり)・・・茜・・・

七場 猿ヶ実小学校にて

茜・麻衣・千尋が、廃校になった猿ヶ実小学校の校庭で、校舎を見つめてい
る。

竜太と隼人がやって来て、校舎を見つめる。

※茜・麻衣・千尋に、菜摘や竜太、隼人の姿は見え、会話も聞こえるが、竜
太・菜摘・隼人に、茜・麻衣・千尋の姿が見え、会話が聞こえることはない。

菜摘が、土手の上から声を掛ける。

菜摘

おった。来るよね、やっぱ。

竜太

なんか？しゃーしい！

菜摘、土手を駆け下りて、竜太と隼人のそばに来る。

竜太

・・・なんか小さく感じる、小学校の校舎。・・・遊具はもう撤去されとる。いつ
廃校になったんやっけ？

菜摘

もう五年・・・かな？

隼人

もうすぐやもんな。工事。

千尋

ここ・・・無くなるんて。道ができるんて。
道？

隼人

高速道路。東九州湾岸線か。

竜太

こんなとこ作ってどうするんかのう？
そうやね。

菜摘

便利になるんやろ？

麻衣

誰が？

千尋

向うの街の人とか、あっちの街の人とか。

麻衣

ウチら関係無いやん。

茜

ウチらはもともと、もう関係ないやん。

麻衣

お？・・・そっか。

茜

(笑って) あんたバカやろ。

隼人

みんなは嬉しいんかねえ？道ができて。

茜

みんなうち誰？

麻衣

んー・・・うちの母さんとか父さんとか、竜太ん家とか真実ちゃんとか？

千尋

色々やろ。

麻衣 色々？

竜太 高速道路とかいらんち言う人もおれば、あると便利っち言う人もおるやろうし。

隼人 でも、できたらできたで、みんな使うんやろうな。

茜 ね。

千尋 壊してしまたら、もう元には戻らんのにね。

菜摘 壊してしまたら、もう元には戻らんのにね。

麻衣 うん。

隼人 そうやな。

茜 無くなつてもうたら、もう見えなくなるんにね。

菜摘 無くなつてもうたら、もう見えなくなるんにね。

麻衣 うん……。

竜太 そうやな。

千尋 あ。

茜 ん？

千尋 太一も来た。

太一がやって来る。竜太たちに気付き、立ち止まる。

竜太 太一。

太一 ……(無視して引き返そうとする。)

竜太 何無視しとんか。

太一 ……。(立ち止まる)

竜太 何無視しとんかちや。

隼人 (竜太に) ちよお。

明日実が、太一を探してやって来るが、竜太たちの様子を見て声をかけられず、見つめている。

竜太 源ジイんところに行ったんか。

太一 ……。

竜太 何言うたんか。

太一 あ？

竜太 源ジイに、出て行けて言うたんか。ミカン山を潰せ、この小学校を潰せ、野枝の樹を引っこ抜けち言うたんか。

お前、野枝にも源ジイにもあんだだけ世話になつとつてから、ようそんなこと言いきるのお。

太一 「お前」ち誰に向かつて言いよるんか。

竜太 お前はお前やろうが！

太一 はあ！？

隼人 (太一に) ちよお、太一もやめれちや！竜太もさ、そんな最初っからケンカ腰に

竜太 ならんでもさ。太一には太一の立場とかあるんやろうしさ。
立場ucci何か。

隼人 あ？

竜太 ここ住んどる人間に「出て行け」ucci言える立場ucci何かちや。

隼人 おいおい。

太一 お前にはわからん。

竜太 はあ？

太一 大学卒業しても就職もせんでから、街でプラプラしとるお前には、わからん。たまに帰つて来たと思つたら源ジイン家に入り浸つて、自分の家んことはほつたらかしとるお前には、絶対わからんucciや。

竜太 はあ！？

隼人 ちよお、やめれちや！今日は神楽やろうが。慎まんか。生きとるモンも死んどる

モンも、今日は垣根がのうなつて、一緒に飲み食いして歌つて踊つて。一年に一回の大事な奉納の日なんやけ。今頃、あいつらも戻つて来とるかもしれん。戻つて、俺らを見るかもしれんやろ。

太一 ……そんなん思うucciたんか。

太一 あ？

竜太 俺が、街でプラプラしとるだけucci、そんなん思ucciたんか。

太一 ……。

竜太 俺が、就職もせんでおるんは、まだ知りたいことがあるけん。ちゃんと勉強せんと、母ちゃんの畑、一緒にやるucci言えんけん…。

太一 ……すまん…。

千尋 竜太。

茜 相変わらず不器用やね。

菜摘 私さ。

隼人・千尋・麻衣・茜 ん？

菜摘 ここ、もう一回、再開させたいなあucci思ucciった。

隼人 あ？

菜摘 明日実さんに赤ちゃんができるやん。

隼人 ああ。

菜摘 赤ちゃんが大きくなつて、6歳くらいになつて、そんな頃には、真実とか、もしかしたら実果とかも結婚しとつて、赤ちゃんできてさ、よそからも人が引越して来たりしてさ。そしたら、ここ、もう一回、小学校にならんかなあつて。

隼人 ああ…。

千尋 菜摘は相変わらずガキやね。

茜 菜摘やけんね。

菜摘 ここ、無くなつてもたらさ。無かつたことみたいになるやん。ここに、みんながおつてさ…。千尋とか、茜とか、麻衣とかもおつてさ…。みんなで、ドロケー（泥棒と警察）やつたり、私の逆上がりの練習に付き合つてくれたり、合唱の練習したりさ、そーゆーこと、無かつたことみたいになるやん。ここに、私

たちが・千尋や、茜や、麻衣が、ちやくんと生きとったことが、無かったこと
みたいになるやん。

無くさんけ。

竜太
隼人

あ？

竜太

ここ。絶対、壊させんけ。

菜摘

・・・。

千尋

カッコいい。惚れる。

竜太

あいつら、今頃、どんな話しよるんかなあ。

麻衣

・・・ごめんね。

千尋

あ？

麻衣

ごめん。

茜

何が？

麻衣

みんなを巻き込んで、ごめん。

茜

はあ？

麻衣

先に逃げてくれたらよかつたんに。

千尋

あんたバカやろ。

麻衣

あ？

千尋

私は、あんたに巻き込まれたりせんちや。私は、私の意思で一緒におつたと。

茜

あ？

千尋

カッコいい！惚れる。

千尋

アンタもバカやろ。

校歌を口づさむ声が聞こえる。真実と恵が立っている。

隼人と竜太、菜摘、麻衣・茜・千尋も続いて歌い始める。

♪白波寄する 八汐の港

豊の海の 香ぞ匂う

見下ろす 黄金の実のなるは

我らが猿ヶ実小学校

寝仏山の 懐に

みそぎの川の 流れきて

蛸舞い飛び 葉の染まる

我らが猿ヶ実小学校♪

菜摘

茜の姉ちゃん……

茜

姉ちゃん。

恵

よっ。

真実

珍しい顔やろ。

恵 久しぶり。
太一 おお。
隼人 神楽見に？
恵 まあ。
竜太 ちいっす。
恵 あんた、でかくなつたんやない？
竜太 んなことねえやろ。
真実 何の連絡もせんだから、急に現れるんやけ。
恵 売れっ子は忙しいけんね。
真実 ああ、そーですか。
恵 (太一に) ここ、無くなるんて？
太一 ああ……。
恵 私……
太一 あ？
恵 あんたは真実と、とつくに結婚しとるち思つとつた。
真実 (慌てて) ちよお、何言いよるん。
恵 もうどーしようもないと？
真実 (さらに追い詰められて) はああ?!
恵 ここ。小学校。
真実 ……(拍子抜けして) ああ。
恵 みんな、残したいっち思うとるんやろ？
太一 ここは……もう県の土地やけん……。
恵 ふくん。

恵、校舎を見つめる。

恵 なくんか……変わつとらんね。誰も通つとらんのに、建物だけは変わつとらん。
真実 ……うん。
恵 ここに通いよつたんよね。あんたも、私も……昔も。
真実 ……。
恵 ……寂しいっち思うんやっか。
真実 あ？
恵 ここ無くなつたら。寂しいっち思うんやっか。
真実 ああ。
恵 ほっとするんやっか。
真実 恵？
恵 もう、忘れていいねっち思えるんやっか。
真実 ……。
恵 わからんね。

真実 ……
恵 (菜摘たちに)、神楽、稽古ちゃんとやっとな？
菜摘 ……はい。
恵 ……茜たちも、見に来るんやつか。
真実 恵…。
恵 ……。神社のあったとこ、押んで来たいんやけど、一緒に行ってくれん？
真実 ……。
恵 もう七年になるけんさ、そろそろ大丈夫かち思って来てみたんやけど、茜が流されとつたとこ、やつぱ一人では行ききらんで…。付き合ってくれん？
真実 もう！早よ言わんね！
恵 うん。
菜摘 私も行く。
竜太 俺も。
隼人 俺も。
恵 ありがと。
真実 じゃあ、みんなで行くか。
全員 うん！

竜太・隼人・菜摘、真実と恵とともに去る。恵たちについていくように、茜・麻衣・千尋の姿も消える。
太一、行こうとして、明日実が目に入る。

明日実 ……。
太一 来とつたんか。
明日実 うん。
太一 ……。(歩き出そうとする)
明日実 たいちゃん。
太一 ……。(立ち止まる)
明日実 私ね、やつぱり、ここに住みたい。
太一 ……？
明日実 ここに…猿ヶ実村に住んでいたい。
太一 ……お前もか…。
明日実 ……ん？
太一 お前も、俺を責めるんか。
明日実 違うよ。
太一 違わんやろう。
明日実 違う。
太一 ……。
明日実 私は、たいちゃんを責めたりしない。私は、私の気持ちを、話したただけだよ。
太一 ……。

明日実 私ね、(お腹をおさえて)このコができたとき、やったー!って思ったの。これで、たいちゃんとおんなじ景色、見えるな!って。子どもの頃のたいちゃんがやってたのとおんなじように、寝仏山の森の中でカブトムシ採ったり、みそぎ川の河原に蛍見に行ったり、裏山の栗の樹に木登りしたり。たいちゃんから聞いてたこと、このコと一緒に体験できるなあって。

太一

明日実 そんなで、廃校になっちゃった猿ヶ実小学校復活させて、このコを通わせたいなあって。たいちゃんだって、そう思ってたでしょ?

太一

明日実 移住体験で東京から来てる松田さん。本格的にこっちに移住したいって、役場に申請出したって。空き家定住支援センターでも、今まで以上に、移住希望者の募集に力を入れて、この村の人口増加に貢献しようって話してて...

太一

こんなところおってどーするんか。小学校ものうなって、病院も買い物も、車で下までおりて行かんないけんようなところで、どーやって子ども育てて、親父とお袋の面倒見るんか。

明日実

「こんなところ」じゃない。たいちゃんが生まれて育ったとこだよ。私もここで暮らしたいって、そう思ったとこだよ。ここで暮らしたいって人を、もっともっと増やす。そしたら、状況はきつと変わる。

太一

変わらん。ここには道路が通る。もう決まったことやけん、従うしかない。しょーがないやろう。

明日実

ホントにそう思ってる?

太一

ごめん。責めてるつもりは無いんだけど。たいちゃん、ホントに、しょーがないって思ってるのかなって。もし、私や、このコのために、何かを我慢しなきゃって思ってるんだったら...寂しい。そんなの、寂しいよ。

太一

明日実 私ね、本当にやりたいことがあって、「絶対やれる」って信じてたら、いつか願いは叶うって信じてるんだ。その「いつか」は、もしかしたら、私が年取って死んだあとかもしれない。(お腹を指して)このコも、年取って死んだあとかもしれない。でも、今、やりたいことをやらなかったら、「いつか」は来ない。

太一

.....

明日実

たいちゃん。私とたいちゃんは、考え方とか感じ方とか、色々違うのかもしれない。でもね、私は、たいちゃんのこと、好きだから。たいちゃんのこと、たいちゃんが生まれて育ったこの村のことも、好きだから。だから...考えよう? たっくさん話して、考えよう? 私たち、どこで、どんなふうに暮らしていくの? いいのか。義父さんも義母さんも、一緒に考えよう? 話もしないで別々に考えるのは、ヤだ。ヤだよ。

太一

.....

明日実、太一の手をとる。

明日実 一緒に帰ろう。それで、夜になったら、義父さんも義母さんも、一緒に神楽に行こう。

太一 ……。

明日実 たいちゃん。

太一 ……うん…。

明日実 約束やけんね。

太一と明日実、何となく校歌を歌いながら、手を繋いで坂を登っていく。

八場 村神楽

村神楽の日。夕刻。佐伯家。

源造と実果が、神楽宿のしつらえをしている。

美羽 父さくん、ちよつと味見してー。

美羽、奥から小皿を手に出ってきて、源造に手渡す。

源造、小皿を受け取り、口に運ぶ。

美羽 どう？

源造 うん。美味しい。

美羽 ホント？

源造 うん。…（ふと美羽を見つめ、急に）あ、ちよつとトイレ。（挙動不審で奥へ引込む）

美羽 ……何あれ？

実果 （笑って）恥ずかしいのよ。それで、嬉しいの、きつと。父さん、美羽の手料理食べるの、初めてだもん。

美羽 そっか。…私も…ちよつと嬉しかった。

実果 何が？

美羽 さつき、「この家は、お前の家でもある」って言われて。父さん、そんなふうにしてたのかって。

実果 そんなの当たり前でしょ。父さんも…母さんも、そう思ってたと思うよ。どこに引越しても、自分たちの暮らす家は、私や美羽の家でもあるんだって。

美羽 ……そっか。

実果 そうよ。

「邪魔するねー」の声とともに、実果が、大助を伴って庭に入ってくる。

実果 実果ちゃん。松田くんも。

大助 ちいつす。
真実 準備、大変やる。男手があつた方がいいちいつす。
実果 ありがとう。
美羽 いらつしやい。

源造 (注連縄を手に出て来て) おお、待つとつた。これ、手伝つてくれ。
大助 ういつす。つて、どーすんすか、これ？

真実 はい、これ持つて(注連縄の端を手渡す)。そつちにかける。
大助 ういつす。(言われた通りにする)

実果 松田くん、こつちに本格的に移住するんだつて？

大助 はい。色々楽しくなつてきたとこなんぞ。

真実 農業体験つちゆつたつて、まだまだ大したことしとらんのやけん、大変なんはこ
れから。

大助 こんなこと言われたら、ここでやめるワケにはいかないつしよ。

真実 (笑つて) へ〜んなの。

明日実が、太一を伴つて庭に入つて来る。

明日実 お邪魔します。

実果 明日実さん。たいちゃんも。

美羽 いらつしやい。

太一、小さく会釈する。

明日実 あの・・・神楽の準備、私たちもお手伝いしていいですか？

大助 どーぞどーぞ、遠慮せんで。

真実 あんたが言うことやないやろ。

大助 あ、そつか。(実果に) いいつすよね。

実果 もちろん！遠慮せんで。

一同、笑う。

庭に、房枝が思いつめた様子で入つて来る。

実果 房枝さん。来くれたんだ。

房枝 話しに来ただけやけ。

実果 え？

房枝 私・・・ウチん土地、売ることにしたけん。

源造 ・・・・あ？

房枝 ウチん土地、県に売ることにしたけん。県を訴える裁判の原告には、もうなれん
けん。

実果 房枝さん・・・何で？

房枝 何でつち、お金が欲しいけんよ。お金があれば、竜太だって焦らんでも好きな仕事に就けばいいんやし。ウチらがここ立ち退けば、お金も貰えて、新しい道路も出来て便利になって、いいことばかりやん。(太一を見て) その県の職員さんの言うた通りよ。

太一 ……
真実 けど、ここん山、無理やり切り崩したりしたら、下ん方の農地にも、もしかしたら、漁業の方にも影響が出るかもしれんて源ジイも…。

房枝 そんなんは、まだわからんことやる。

真実 ……

房枝 何でそんな目で見られんといけんのかねえ。あんときも思ったんよねー、北ん方のガレキ受け入れたとき。地震でガレキがいっぱい出て、処理できんで困ってるって言うけ、ほんならこつちで受け入れて燃やすん手伝ってやればいいつち言っただけなんに、「そんなことしたらこつちまで汚染される」つち文句言われて…。今、現に、あつちからそつちまで早う行きたいつち思つとる人たちがあつて、工事が止まつても困つとるんやつたらさ、どいてやればいいやん。私たちはお金貰えるワケやし。新しい工場もできて、サービスエリアもできて、わざわざ街行かんでもウチから通える仕事が増えて、めでたしめでたしやん。

真実 房枝さん。ホントにそう思うとるん？

房枝 思うとるよ。当たり前やん。…。(真実に) あんたも、早よ土地売つてお金貰うた方がいいんやない？ほしたら、きつつい畑仕事せんでよくなるんやけさ。

真実 ……

明日実 ……村を出て、何をやって暮らすんですか？

房枝 パートでも何でも、仕事ならいくらでもあるやろ。

明日実 それって、「暮らし」でしようか。「暮らし」って、仕事とか収入源とかとかそーゆーことじゃくて、日々…何をするかつて言うか…。

実果 「暮らし」つてさ、…朝起きて、畑に行つて、土に触つて、お水をあげて、草刈りをして、美味しい野菜ができたら、近所の人みんなで分け合つたり、一緒にお茶を飲んだり、そーゆーことなんだつて。日々、命を育てて、育てた命をいただいで…「人の暮らし」つてのはそーゆーもんだつて。房枝さんに教えてもらったんだよ、私。

房枝 もう疲れたけん。

実果 ……

房枝 佐智んとこも畑続けきらんで出て行くんやろ？種子法やら種苗法やら廃止されて、これから畑続けてくんも色々大変やし、ほんならパツパとお金貰うて、街で便利な暮らした方が、竜太だつていいに決まつとる。(実果に) あんたらも無理してこんな田舎におらんで、お金貰うて街に出ればいいやん。

源造 竜太は、もし、あんたが土地を売つてしもうたとしても、農業やるやろ。

房枝 ……

源造 竜太が俺ん畑を手伝いよつたんは、あんたに、自信持つて家継ぐつち言いたいけ

んや。そんなために、俺ん畑手伝うてみたり、真実んとこまで色々聞きに行ったり…。

竜太はあんたんことしつかり考えとうけん…。

わかっとう！わかっとうけん、今のうちに土地手離すんやん。あんコが、ウチ継ぐとか馬鹿なこと言い出す前に売ってしまわんなっち…。

…そっか。

？

私が引っ越さなければ、大事な人とずっと一緒に暮らせるんだって思ってたけど、相手の方が引っ越しちゃうってことも…あるんだなあ…。

…。

へ〜んなの！

美羽…。

美羽

だってヘンじゃん。子どもが「やりたい！」って思ってることがあって、それを親が邪魔するとか、すっごいヘン！（房枝に）親だったら、ちゃんと協力してやんなさいよ！…ああ、もう、ヒトのことはよくわかるんだけどなあ…。

楽しいと思いますけどね。

？

大助

いや、農業。手かけたらかけたぶん、少しづつ結果が出てきて。竜太さんも、楽しいって思ってると思うんだけどなあ…。

房枝

竜太・菜摘・隼人が駆け込んでくる。

隼人

寝仏山に月のかかったよ。

真実

いけん。もう始めんと。

大助

へ？

実果

（指して）あそこの山に月がかかったら、神楽を始める合図。

大助

へ〜。俺も、ここで神楽見てていいっすか？

実果

もちろん！

哲男が「セ〜フ！」と言いながら、土方の恰好のまま庭に駆け込んでくる。

源造

哲男。

哲男

よっ。

竜太

おせ
遅〜わ。

哲男

しゃーしい。間に合ったやろうが。

実果と真実、みんなに神楽の衣装を配る。

房枝、行き場を失くして庭の隅にとどまっている。

実果 房枝さん。(神楽の衣装を房枝に差し出す)
房枝 (衣装を受け取らず)・・・。

美羽、実果が持っている衣装を取り、問答無用な様子で房枝に手渡す。
房枝、しぶしぶ受け取る。
恵が佐智を伴って庭に入ってきて来る。

実果 佐智ちゃん。

恵 前ん道でウロウロしとった。

菜摘 (佐智に神楽の衣装を手渡して)これ。

佐智 けど・・・

菜摘 帰ってくればいいやん。あんたがどこで暮らそうと、神楽の日には帰ってくれば
いいやん。私はここで待とうけん。

佐智 ……。

ウチらはちゃんと生きとるけんち、千尋や麻衣や茜に、見せてやらんな。

・うん。(衣装を受け取る)

真実 (恵に神楽の衣装を渡して) ほい。

恵 (受け取って) ありがとう。

竜太、太一に衣装を渡す。

太一、受け取り、明日実にも着せてやる。

場を清める声が響き渡り、猿ヶ実の神楽が始まる。

母親が亡くなり、泣き崩れる娘。

姿を現す黄金色の猿。

横たわる母親が、自分の身体から一匹の蛆虫を剥ぎ取り、娘に手渡す。

再び猿が顔を真っ赤にして現れ、娘を追いかけ始める。

必死で逃げる娘。

もう捕まるかと思つたそのとき、

蛆虫が、蜂へと姿を変える。と。

神楽の声に導かれたように、死者たちが現れる。

千尋、茜、麻衣の姿も見える。

野枝が、赤ん坊を大事そうに抱いている。

源造・実果・美羽は、何者かの気配を感じている。

生者と死者が入り交じって夜神楽が続く。

九場 美羽が帰る日

村神楽が行われた翌日。佐伯家。朝。

大助も含め、村人たちが、酒席の片付けをしたり、供え物を整えたり、衣装

を畳んだり、神楽の後片付けを手伝っている。
美羽も片付けを手伝っている。

真実 (明日実に) あんた、夕べ頑張ったね。
明日実 へ？
真実 神楽。お腹、大丈夫なん？
明日実 あ、はい。
真実 一人前に舞いよって・・・猿ヶ実ん人みたいやった。
明日実 ……(真実を見る)
真実 あ、ゴメン。猿ヶ実ん人やったね。
明日実 ……(じんわりと笑顔になり) うん。

美羽、何となく庭の樹を見つめる。
源造が庭に入ってくる。

美羽 父さん。おかえり。
源造 ただいま。これ。(美羽に、かごに入ったミカンを差し出す)
美羽 ミカン。
源造 食べるか？穫れたてのミカン。
美羽 ありがと。(ミカンを一つ手に取る)

美羽、人々が立ち働いている姿を見つめる。

美羽 我が家は昔っから変わんないのね。いつも誰かが出入りしてて賑やかで。
源造 すまん。
美羽 え？
源造 野枝は・・・家族と家族じゃないモンの区別ができん・・・面白いヤツやった・・・。
美羽 そのせいで、お前や実果に寂しい思いをさせたかもしれないが。
源造 ……そんなこともあったけど。(ミカンの皮に爪を立て、剥き始める。甘酸っぱい香りが鼻腔をくすぐる) ん、いい匂い。
源造 そうか。

源造、嬉しそうに美羽を見つめる。

美羽 ……。(ミカンを一房口に入れ) 美味しい。
源造 ……やっぱりお前も野枝に似てる。
美羽 ……。

奥から実果が出てくる。

実果 お茶入ったけん、みんな、一休みして。

人々、口々に「ありがとう」などと言いながら奥へ向かう。

隼人 (大助に) 松田くんも、お茶行こう。

大助 あ、はい。．．．大助でいいっすよ。俺、猿ヶ実で暮らしてくんで、そっか。．．うん。

隼人、大助と連れ立って、奥へ。

実果、その様子を微笑んで見つめる。

実果 あ、美羽、帰りの仕度でき．．．(源造と美羽の様子を見て) どしたの？

美羽 ん？．．ううん。

実果 (二人を見比べて) そう？あ、もうちょっとしたら、車で送ってくから、ありがとう。

実果 (カゴのミカンに気付いて) ミカン？

源造 さっき腕いできた。

実果 そう。

美羽 ．．．私ね、拓海が、今通ってる私立の学校辞めたいって言ったとき、頭ごなしに叱つちやって。「母さんは視野が狭い」って言われちゃった。

源造 あ？

美羽 私は、自分のコには寂しい想いさせたくなかったから。ちゃんと見てあげなきゃ、守ってあげなきゃって思ってるつもりだったのに．．．。結局、あのコたちのやりたいことを邪魔してただけなのかな。

実果 そんなことないわよ。

美羽 拓海・「ずーっと私立に通ってたんじや、見えないモノがある気がする」って。近所のコたちが通ってる公立の中学に転校して、三年になったら受験したい高校を自分で探すんだって。

実果 (笑って) 美羽そっくり。

美羽 (驚いて) え！？

実果 だって、美羽だってそうだったでしょ。優ちゃんもたつくんも、私や美羽が家出したのとおんなじくらいの年頃になったんだねえ。今まで、美羽がちゃんと守ってきたから、もっと違う世界を見たいって思えるようになったんだよ、きっと。違う世界？

美羽

実果 地球の裏側を見てみたり、まだ出会ってない大事な人を探しに行ったり。．．．。

源造、美羽を見つめて少し笑う。

美羽 何？

源造 お前たちが家出てったとき、野枝も、そんな顔しとった……。

美羽 ……。

源造 野枝は……(庭の樹を見つめ) どうか自分がいなくなっても、子どもたちや、そのまた子どもたちが、この樹の実を食べてくれるようにって、この樹を植えた。俺は、この村に、野枝の樹の子どもたちをたくさん増やしたい。……(かごのミカンを指して) そのミカンは、この樹の実やないが、野枝と一緒に育てたミカン山の樹の実やけん、拓海や優にも食べさせてやってくれ。
……うん。

哲男が、土方の恰好で血相を変えて庭に駆け込んで来る。

哲男 源ジイ！小学校の工事が始まる！

源造 は?!

実果 え？

哲男 今朝、急に、今日の現場は小学校やつち言われて。俺、どうしたらいいんかわからんで……。

竜太 (奥から聞きつけて出て来て) 何かそれ?!

太一 そんな話聞いとらん。

隼人 神楽の奉納したばかりなんに。

菜摘 何で……。

哲男 すまん。ホントすまん!

竜太 (哲男に) お前のせいやなかるうが。

真実 太一。それ、何ともならん?

太一 ……。

源造 とにかく、行ってみる。

明日実 待ってください。私、ちょっと勤め先に電話してみるんで。

太一 あ？

明日実 顧問の弁護士さんがいて、力になってももらえるかも。今すぐ来てもらえないか聞いてみる。(スマホを取り出し) あ、電波悪い……(慌てて庭の外に行く)
私、知り合いのディレクターに、今すぐ取材に来てもらえんか頼んでみる。取材?

真実

恵 もともと頼んどったと。猿ヶ実の災害と立ち退きのこと取材してくれっち。

真実

恵 ?

恵 まずは何知ってもらわんと。だって、おかしいやろ?ここに、昔っからずーっと住んどった人たちが、これからもずーっとここにいたいっちはいいよるだけなんに、国が決めたけんっちは何でどかないけん?これは、ここん村だけの問題やない。よそんな土地でも起こるかもしれんことやる。みんなが、それでいいんかどうか、ちゃんと知っとならわんと。ジャーナリストなら何でもいいけん来いっち!

(スマホを取り出して庭の外へ)

(実果に) 行ってくる。

源造

実果 うん。

房枝 あんたは娘の見送り。

源造 あ？

房枝 めったに会えんのやけ、ちゃんと送ってやらんな。

源造 しかし・・・

房枝 (竜太に) 何しよんね。行くよ。

竜太 は？

房枝 小学校。失くしたくないんやろ。まずは抗議に行かんと。

竜太 抗議？

房枝 ほら、早う。

隼人 俺も行く。

菜摘 私も。

佐智 私も。

大助 俺も行きます。

源造 手出したらいかんぞ。抗議するだけやけんな。

竜太 おう。

源造 俺もすぐ行くけん。

房枝、竜太・隼人・菜摘・佐智・哲男・大助を従え、庭を出て、坂の下に向かって駆け出す。

太一 俺、頼んでみる。

源造 あ？

太一 仕事を請け負つとるんは地元の業者やけん。哲男みたいにやりたくてやりようワケやないヤツもおる。やけん、みんな抗議すれば・・・。

明日実 (戻ってきて) 弁護士さん、来てくれるって。所長が頼んでくれて。

恵 (戻ってきて) 取材、来てくれるって。車、すっ飛ばしたら1時間もせんで着く

やろ。

太一 とにかく、弁護士さん来るまで工事待ってもらえんか頼んでみる。(出て行く)

真実 恵、学校行くよ。

恵 うん。

明日実 私も。

真実 あんたはお腹・・・

明日実 大丈夫。これは、私たちのこれからに関わる問題だから。

真実 ・無理せんでね。

明日実 うん。

真実・恵・明日実、出て行く。

美羽 父さん、行って。小学校。

源造 いや……。
美羽 来るから。
源造 あ？
美羽 私、また、必ずここ来るから。
源造 ……そうか。
美羽 うん。だから、いつてらっしゃい。
源造 ……うん。行ってきます。

源造、出て行く。

美羽 お姉ちゃんも行って。
実果 でも空港まで……

美羽 タクシーでもバスでも自分で何とかするから。ここが、お姉ちゃんの大事な場所
なんでしょ？

実果 (頷いて) 待つてるからね。このあたりは、夏の初めには、ミカンの白い花がい
っぱい咲いてすつく綺麗なの。美羽にも見せたい。今度は、きつと、(庭の樹を
見つめて) 母さんの樹にも、花がつく。来年も、その次の年も、私たちはずーつ
とここにいます。

美羽 うん。

実果 いつでもここに会いに来て。待つてる。父さんと、母さんと、みんなと、待つて
るね。

美羽 うん。

実果、出て行く。

美羽はそれを見送る。

美羽、庭を出て、坂の下の小学校を見つめる。

座り込みをしている人々がいる。

自分たちの暮らしを守りたいと叫んでいる人々がいる。

排除しようとするモノたちに、抗う人々がいる。

歌を歌って、話をして、暴力に抗っている人々を見つめる美羽。

美羽 ……私も行く。

美羽、坂の下に向かって駆け出す。

エピローグ

何年先か何十年先か、いつかの未来のどこかの場所。

瓦礫の中から、ぶつと小さな芽が出る。

芽はだんだんと伸びてやがて樹になり、枝葉が出て、真っ白い花を咲かす。

どこからか、蜂の羽音が聞こえてくる。

終わり